
30DAYS

しの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

30DAYS

【Nコード】

N1467U

【作者名】

しの

【あらすじ】

女子高生・明希とイケメンアーティスト・晴人との甘く切ないラブストーリー。

舞台は沖縄より南にある離島。物語は、明希の家が営む民宿に、晴人が泊まりにきたところから始まります。

1 DAY

深夜3時、東京の夏は夜でも蒸し暑い。

この蒸し暑さになれたのは、上京してから何年目からだろう？
そんなことも思い出せないくらい、私の体は東京の暮らしに慣れき
ってしまっていた。

消灯された廊下を自販機がぼんやり照らしている。

静かな病棟にガコンと缶コーヒーの落ちる音が響く。昔は全然飲め
なかったブラックコーヒーが、今はそれがステータスになっている。

「新垣先生、どちらへ？」

コーヒー片手に廊下を歩いていると、看護師に声を掛けられた。

「落ち着いたから、ちょっと外の空気吸ってきます。何かあったら
連絡ください。」

この病院に勤めて四年…まだまだ医者としては新米だけど、今の職
場はスタッフもいい人が多くて嫌いじゃない。

大きな窓ガラスから月明かりが照らす待合室を横切る。

(今日で何日目の泊まりだろう…お風呂に入りたい…)

この仕事にオーバーワークは当たり前。この時間になると頭も動か
ない。

自分の欲求だけが、意識を支配しようとしてくる。

救急外来の出入口から庭へ出ると、生暖かい風が吹いていた。
お気に入りのベンチに座り、深く息を吐いた。

（疲れた…）

後ろで一つに結んでたシュシュを取り、軽く頭をふった。昔は短かった髪も美容院に行けないから、かなりほったらかしに伸びている。もうすぐ三十路になる女の髪型じゃない。

この歳にもなると、地元の友達や大学時代の同級生からの、結婚や子供ができたなどの報告が多くなってきた。

最近じゃ、晩婚も高齢出産も珍しくないし、同僚のスタッフもまだ独身が多い。だからってわけじゃないけど、特に焦ることもしていない。

ポケットから携帯を出して、画面を見るとメールの着信を知らせるライトがピカピカ光っている。受信箱を開くと、新着メールが3件入っていた。

まず、1件目。地元の友達の咲恵さき。彼女とは小学校からの付き合いで、今や二児のママだ。私の一番の親友で、よき相談相手。

『忙しい？ちゃんと食べてる？今年の誕生日は帰ってこれそう？返事待ってるよ』

メールと一緒に、子供の写真が添付されている。真っ青な空の懐かしい故郷が背景で、海をバックに二人の子供が満面の笑みでピースしていた。

フツツと笑みがこぼれた。

「誕生日かあ…帰りたいなあ。」

呟いた声が、儚く消える。忙しいことを理由に、医者になってからはほとんど誕生日に帰ってない。

2件目のメールを開く。健人^{たけと}だ。学生時代から付き合っていた元カレ。嫌いじゃなかったけど、お互いに仕事が忙しくなり自然消滅した。今じゃ、ただの飲み友になっている。

『よお！相変わらず忙しいか？時間できたら、飲もうぜ！』

(最近、飲んでないなあ…)

3件目はお母さんだ。

『チケット届いてたから、送っておきました。忙しいのは分かるけど、たまには帰ってきなさい！お父さんも心配してるから。』

(チケット…?)

メールの内容からして航空券だろうか…。何のチケットか分からず、連絡したくても時間が時間なので諦めるしかない。しかも、病院に泊まり込んでるから、きつと自宅のポストはいっぱいになってるだろう。

携帯画面から目を外して、夜空にぽっかり浮かぶ月を見てふと思い出した。

もし、十年後お互いまだ結婚してなかったら、その時は俺と結婚して？

あの夏の日、彼から言われた誓いの言葉。

あの時の私は、その言葉を信じる勇気も、ずっと待ってる強い心も持っていなかった。

そういえば、もうすぐ彼と出会ってちょうど十年後だ。

あれ以来、私から連絡を取ったこともなければ、彼から連絡もない。でも携帯番号を変えることもできない、ズルい女だ…

あの時も綺麗な月が出ていた。

高校最後の夏休みを目前に、終業式が終わったばかりの教室内は早くホームルームが終わらないかと騒かおっていた。担任の香ちゃんかおり…童顔で背も低いから、クラスの皆からそう呼ばれてるんだけど、もちろん親しみの意味も込めてね。その香ちゃんが静かにしてと叫んでいる。

教室の窓からは、澄み切った青空。真夏の太陽の日差しがコバルトブルーの海に降り注いでキラキラ輝いているのが見える。

たまに海風が私の肩まで伸びた髪を撫でていくのが心地いい。沖縄より南にあるこの島の、私はこの景色が大好きだ。

(いい天気だなあ…)

なんてことぼんやり考えてたら、スカートのポケットの中の携帯が鈍い音を立ててメールの着信を知らせている。

『学校が終わったら、すぐ帰ってきてね!』

お母さんからのメール。

『分かった!』

…と、メールの送信と同時に、香ちゃんが受験生なんだからくれぐれも羽目を外すなと釘をさして、ホームルームは終わった。教室内の空気は一気に夏休みへの解放感で満ち溢れ、皆それぞれこれからの予定を話すのに夢中だ。

「明希!これから進路指導室に行かなくちゃいけないから、先に帰ってて。」

窓側の席の私に向かって廊下側の席から親友の咲恵さきえだ。一緒に帰る約束をしてたから、申し訳なさそうに顔の前で手を合わせている。

「いいよ。私も早く帰ってメールが来たから、すぐに帰らないといけないし。」

「民宿、忙しいの?それじゃあ明希、またメールするね。」

家は民宿を営んでいて、夏場は私も手伝っている。

「ちょうど今日から長期の滞在のお客さんがあるからじゃないかな。咲恵も進学でしょ？お互い頑張ろうね。」

またねと手を振り、おだんごヘアを気にしながら廊下を走っていく咲恵を見送り、私もカバンをさげて教室を出た。

「新垣さん！ちょっといいかな？」

廊下に出ると、香ちゃんに呼び止められた。

新垣 あしがきあき 明希

これが私の名前：ちょっと呼びにくいんだけどね。単に好きでこの名前になったわけじゃなく、これにはちゃんと理由がある。

それは私が養子だからだ。実の母の妹、つまりは私の叔母にあたる美佐みささんに小さい頃に引き取ってもらった。民宿も叔母さん夫婦が経営している。

「新垣さん。この前の進路希望なんだけど…親御さんも知ってるのよね？」

ヒールを履いてるのに、私より少し背が低い香ちゃんは私を見上げて話を切り出した。

「…知ってるよ。」

この場合の親御さんは、叔母さん夫婦のことになる。ちなみに香ちゃんも、私のこの事情を知らない。

(その話か…)

心の中のため息をつく。

私の進路はお母さん達にも報告済みで理解も示してくれている。問題は、先生達にあんまりよく思われてないということ。ここが田舎の離島で、ほとんどが地元で就職するか家業をそのまま継ぐのが一般的なのだ。進学するとしてもせいぜい沖縄の大学が良くても九州の大学が主だ。

そんな割合の中で、私は先生達から見たら異例中の異例なのだろう。

「じゃあ本当に東京の大学が第一志望でいいのね？そうなるのかなり頑張らないと難しいよ？ちゃんと対策も考えないといけないし…」

香ちゃんの顔は、私を説得しようと真剣だ。

「うん、分かってるよ。でも志望校は変える気ないし、ちゃんと難しいのも分かってるから。」

私の決意が固いのを察したのか、これ以上の説得は無理だと思ったのか、香ちゃんは納得したというよりは諦めた感じだ。

「…そう、分かったわ。夏休み中も私や他の先生もいるから、困ったことあったらいつでも相談してね。それから夏期講習には必ず出てね。」

「香ちゃんに？それはまた心配だな。」

冗談めかしに言うと、言ったなあと頬を膨らます香ちゃんにさよならをして、下駄箱へ向かい、校舎を出た。

「明希！もう帰るのか？」

照りつける太陽の下、グラウンドを通り過ぎてると後ろから声をかけられた。

幼なじみの航太だ。野球部だけに相変わらずいい感じに日焼けしてて、1ヶ月前は五分刈りだった髪がソフトモヒカンくらいになっている。

「うん、お母さんが早く帰ってこいって。咲恵も進路指導だし。航太は？」

ちなみに咲恵と航太は、私が養子だと知っている。

「ふ〜ん。俺は今から野球部に顔出してから帰るよ。」

「引退したのに好きだね〜。いくら就職するからって遊んでると咲恵に怒られるよ?」

航太と咲恵は高校一年の時から付き合っている。咲恵が受験に忙しいのをいいことに、就職組の航太は部活を引退した後でもよく遊びに行っているのだ。

「うつせえよ。それよりあの話知ってるか?」

「話?」

「なんだ、咲恵から聞いてねえのかよ。この島を舞台にしたドラマの撮影で神谷晴人が来るらしいぜ。」

「え?!神谷晴人が?本当にい?」

あまりに非現実的な話で、航太を見る目が厳しくなる。

「お前その目は信じてねえだろ！」

「当たり前だよ！だってあの神谷晴人だよ？こんな島に来るわけないじゃん。」

神谷^{かみや はるひと} 晴人…結婚したい芸能人、抱かれない芸能人等々で常に上位をキープし、活動は歌にドラマにCMにと幅広くその甘いマスクに落ちない女はいないと謳われるほどの超人気イケメン芸能人だ。

「それがマジなんだって！お袋が言ってたから間違いないよ！」

「おばさんが？」

やけに自信満々にいきる航太に圧倒されつつも、航太のおばさんは役場勤めだ。その筋からの情報なら本当かもしれない。

「信じる気になったか？」

「信じるも何も、本物見たら信じるよ…って携帯鳴ってるからまた今度ね。」

またもやスカートのポケットの中で震えてる携帯。

「なんだそれ。なら、賭けようぜ。」

「はあ？賭け？」

かなり自信があるのか、航太は神谷晴人が来る来ないを賭けると言

い出した。

そんな中でも私の携帯はまだ震えている。

「そう！神谷晴人が来るに、俺は賭ける。」

「…馬鹿馬鹿しい。」

付き合ってもらえないと思って、航太を無視して帰ろうとする。

「明希、逃げんのか？」

「…何それ？誰が逃げてんのよ。受けて立つわよ！」

ニヤリと航太は笑った。私の負けず嫌いな性格を知っているのだ。

「じゃあ決まりだな。俺は来る、おまえは来ないに賭ける。」

「で、何を賭けるの？」

「そうだな、お互いの家で1日バイトするってのは？」

「私が酒屋で、航太が民宿ってこと？いいよ。」

上手く口車に乗せられて賭けは成立。負ければ、航太の家の酒屋さんを手伝うことになった。

「それじゃあな！」

負ける自信が余程ないのか、野球部が練習し始めているグラウンドへ走って行ってしまった。

まだこの時は、賭けを本気にしてなかった私は後で後悔する羽目になる。

走っていく航太を見送り、ふうつと息をついて私も家へと歩き出した。いつの間にかバイブが止まった携帯をポケットから出して不在着信を確認する。

(知らない番号…)

すると、また着信がある。不在着信と同じ番号だ。出ようか迷っている最中も、まだ鳴っている携帯。
仕方なく通話ボタンを押して耳に携帯をあてる。

「…もしもし?」

「もしもし?出るの遅いよ!それより今どこ?」

(間違いかな?。知らない人の声だし…っていつか何で私が怒られてるの?)

「…あの誰かと間違えてないですか?」

「…え?これって山崎の携帯じゃないの?」

「違いますけど…」

「…あゝ、ゴメンね。急いでたから間違えたみたい。本当にゴメンね。」

私の耳に無機質なツーツーという音が響く。相手はよっぽど急いでたのか最後のほうは早口で聞き取れなかった。

「今時あるんだ、間違い電話…」

暗くなった画面を覗きこんで思わず眩いてしまった。

これが、彼と私の出会いだ…というよりは、会話だった。

学校から海岸線をひたすら歩いて家に着く。

「ただいま〜。」

「明希、おかえり！頼みがあるからすぐきてちょうだい！」

お母さんの声が台所から、帰ってきたばかりの私を急せる。

「何？手伝いなら夜からでもいいでしょ？着替えくらいさせてよ。」

一般家庭より広めな玄関で靴を脱いでると私以外に男物の靴が三足あるのに気付いた。

（もうお客さん来てるの？）

チェックインの時間までにはまだ時間がある。

曾祖父の代から民宿を営んでいて、島内じゃ老舗の民宿だ。宿はそ

んなに大きくないけどアットホームが売りで、毎年夏場は海水浴客や観光客でいっぱいだ。

私も休みの日は手伝っていて今夜から…というより今からはバイト扱いだ。

入り口から廊下突き当たりのドアを開けて母屋の台所へ。お客さんの料理もここで作っているから、かなり広い造りになっている。

「もうお客さん来てるの?」

カバンをテーブルに置き、冷蔵庫から麦茶を出しながら、昼食の準備をしているお母さんに聞く。

「そうなの、例の長期滞在のお客さん。予定よりも早く着いちゃったみたいで…それで、明希に頼みがあるのよ。」

「ふ〜ん。何?頼みって?」

「そこのお茶をお客さんとこに出してきてくれない?お父さんが今チェックインしてるから。」

「えっ!まだ制服なのに?」

「気にしないでいいわよ。私、今手が離せないから。お願いね。」

お母さんがニッコリ微笑みながらグツと親指を立てている。微笑むというより含み笑いに近い感じで、何か企んでるようにも思えた。

私の喉を麦茶がゴクつと音を出して通り過ぎる。いつもならお母さんの担当なのに…と不思議に思いながらも、お客さんを待たせるわけにもいかず、渋々麦茶の入ったグラスを三つお盆に乗せて台所を出た。

階段を上がって二階の客間へ。

コンコンとノックをして声をかける。

「失礼します。お茶をお持ちしました。」

「はい、どうぞ。」

お父さんが中からドアを開けてくれた。けどやっぱり制服のまま接客するのが気が引けて、

お父さんに任せようかとお盆を渡そうとした。

「お父さん、これお母さんが…」

「明希、ちょうど良かった。今日から滞在されるお客様なんだけどもね。長期滞在だから挨拶していきなさい。」

「え？今？」

思わぬ展開に動揺して、お盆の上の麦茶が揺れる。

「後じゃダメかな？制服はさすがに嫌なんだけど…」

「そんなこと気にしなくていいから、さあ早く。」

大らかというより乙女心に鈍感なお父さんは、急かすように背中を押してドアを閉めた。

さっきのお母さんといい、今のお父さんといい何か引っ掛かる。いつもなら制服で客前には出さないし…

それにこの急ぎ様…そんなに大事なお客さんなんだろうかと、頭の中に？マークが飛び始めた。

「すみません、お待たせして。」

お父さんが襖を開けて和室の部屋の中に入る。

「いえ、気にしないでください。」

部屋からはちよつとしゃがれた男性の声が返ってきた。この時期に珍しくおじいさんの声だ。

「ちょうど娘がお茶を持ってきたので、ご紹介します。入りなさい。」

(マジで嫌なんだけどなあ…ええい！)

部屋の外でため息をついて、仕方ないと目を瞑り意を決して部屋へ入る。

「失礼します。」

「君が明希ちゃん？」

「えっ？」

聞き覚えのある声に名前を呼ばれて私は目を開け、目の前にいる人を見た。

「…!!」

開いた口が塞がらないとはこのことだと思った。
私の瞳はその人から逸らせないでいる。

三人の男性客、私はてっきり大学生の観光客だろうと思っていた。

一人目は白髪 of 顎髭の生えたおじいさん。ラフな格好だがどこことなく気難しそうな感じが見てとれる。

二人目は二十代前半くらいの流行りのカットで眼鏡を掛けてインテリっぽいけど、ちょっと遊んでそうな感じ。しかもなぜかスーツだ。そして私の名前を呼んだのは三人目、あの神谷晴人だ。歌を知っているから聞き覚えがあるのも無理はないし、ゆるフワの髪に二重の切れ長の瞳、凜とした鼻筋に薄い唇：間違えるわけがない！真正正銘テレビでしか見たことのない神谷晴人だ。そんな人が私の目の前に座っている。

しかもこっちを見てにっこり微笑んでいる。

ついさっき航太と話してただけに驚きすぎて体が動かない。

息をするのも忘れるくらい、時間が止まったかと思った。

「な…?!」

なんでここに？って言いたいの、あまりに驚きすぎて言葉にならない。

お盆の麦茶を落とさなかったのが奇跡なくらいだ。

口を開けて固まっている私を見兼ねたお父さんはお盆を奪い、すみませんと言いながら平然と麦茶を出している。

お盆を取られた私の両手はまだお盆を持ったままの形だ。どれくらい固まってたか分からないくらい、私はその場で立ちすくんでいた。

そんな私を現実に戻したのは彼の、神谷晴人の笑い声だった。

「アハハハハ！」

しかもお腹を抱えて笑われている。

「いいね、その反応。」

「晴人さん、失礼ですよ。」

神谷晴人より若めの眼鏡の男性は彼を嗜み、私にごめんねと謝っている。

神谷晴人はやっと笑うのを止めてくれた。それでも私がかかりのツボに入ったのか彼の綺麗な瞳は涙に潤んでいる。

ハッと我に返った私は笑われていることとにかく恥ずかしくなって、思わず俯いた。自分でも顔が真っ赤になっていくのが分かる。

そんな中、お父さんが麦茶を配り終わり私を紹介してくれた。

「娘の明希です。まだ話していなかったので、すみません。さあ挨拶しなさい。」

ポンと背中を押され、一步前に踏み出してしまい余計に恥ずかしくなってしまった。

が、今のお父さんの話でモヤモヤしていた変な態度の訳が分かった気がした。もう頭の中はパニックだ。

「…よっよろしくお願いします。」

緊張と恥ずかしさのせいで口がうまく動かずつい声が裏返ってしま
う。

穴があつたら入りたいともこのことだと思った。

とにかくこの場所から一秒でも早く逃げたい衝動に駆られて…

「しっ失礼しました！」

「明希?!」

お父さんの声が後ろで聞こえたが、ボタンとドアを閉めて一目散に
お母さんがいる台所へ走った。

その時、彼が私を見ていたのも気付かずに…

「すみません、説明しておけば良かったんですが…」

「いえ、あんまりにも可愛い反応だったので。つい…僕が悪いです
から。」

目に溜まつた涙を拭いながら俺はちよつと罪悪感にかられた。

今まで自分が芸能人っていうのもあって、色んなファンや業界人に
も会ってきた。けど、あんな風に素直に驚かれたのは明希ちゃん…

って勝手に呼んでるけど、その明希ちゃんが初めてだった。

娘さんがいるとは聞いていたけど、まさか女子高生とは思わなくて、パッチリ二重の大きい瞳が俺を捕えた瞬間さらに大きく見開いて、ふっくらした唇が何かを言いたげに開いたままだ。

セーラー服のスカートからスラツと伸びてる細い脚も微動だにしない。

その姿があんまりにも可愛いくて、思わず本音が出ちゃったんだよね。

「これからお世話になるんですからちゃんと後で謝ってくださいね、晴人さん。」

確かにその通りだ。明希ちゃんを傷つけたのは間違いない。

「そうだぞ、神谷くん。おかげでこちらも自己紹介が出来なかったからな。」

それもそうだ。本当ならお互いに挨拶して、今頃は明希ちゃんも笑ってたかもしれない。

「娘には私から言っておきますから。では夕食は19時に用意しますので、食堂までお越しください。それまではゆっくりしてくださいね。」

とにかく謝らなきゃと思った。

なんて会話がされてるとは知らない私はお母さんに詰め寄っていた。

「お母さん…どつどつ」と。

昼食の盛り付けをしていたお母さんは私を見るなり大笑いしている。

「ゴメンゴメン。ちょっとしたサプライズよ。それより見た？話した？神谷晴人！カッコいいよね。」

「サプライズ?!」

まさかそんな言葉が出されるとは思ってない私の頭は完全にフリーズしてしまった。

「そう、サプライズ！明希、神谷晴人のファンでしょ？知らない方がビックリするし、それに楽しいじゃない？」

怒っている私をよそにお母さんはケラケラ笑っている。

…忘れていた。そう、お母さんは楽しいこと好きで、さらにサプライズも大好きだということを…

これまでに誕生日に同じ手に引っ掛かってきたことを思い出した。満面の笑みを浮かべて楽しそうにしてるお母さんに、いつも私は何も言えなくなってしまう。でもさすがに今回ののは黙ってられなかった。

「お母さん…私、恥ずかしくてもう死にそうだよ。神谷晴人に大笑いされたんだよ。」

今までの出来事を全て話した。極度の緊張に耐えていた私の足は力が抜けて私は椅子に腰を下ろした。ついでにテーブルに顔を伏せた。

「だからゴメンってば！ほらご飯できたから機嫌直して。」

「そういう問題じゃないし!!それに、神谷晴人のファンなのは春生のほう。もう、これから1ヶ月もいるのに初対面がアレじゃ、どう顔合わせていいのよ。」

そう!これが彼と私の出会いだ。こんな恥ずかしい出会い方をした私は恥ずかしさのあまり泣きそうになった。

「明希、あーきちちゃん。ほらご飯食べて機嫌直して、ね?」

お母さんもさすがに笑われるなんて思っていないかのだろう。テーブルに伏せた私の頭を撫でてご機嫌取りに必死だ。

キュルルル…

私のお腹の音：KYにもほどがある。

お母さんの顔を盗み見みると、笑いをこらえている。そんな顔を見ていたら、なんだかいじけている自分がバカらしくなってきた。

「ほら、ご飯食べて元気出なさい。」

もう一度頭を撫でられる。

「いただきます。」

手を合わせて、お昼ご飯の炒飯を食べ始める。すると、お父さんが客間から戻ってきた。手には宿の台帳とお盆を持っている。

「明希、さつきは悪かったな。」

お父さんは、私を見るなり謝ってきた。しかもお母さんと違ってかなり深刻そうに…

「もういいよ、お父さん。私気にしてないから。」

全く気にしてないというのは嘘になるけど、そう言わないとお父さんが気にしてしまうのだ。

「ほら、明希もこう言ってるんだし。大丈夫よ」

「美佐：元はと言えばお前が悪いんだろう。内緒にしとくとか言うから。」

と、お母さんにブツブツ言っている。そんなお母さんは笑いながらゴメンと言っている。

うちはいつもこんな感じだ。お母さんは割と大雑把で細かいことも気にしない。気にしすぎなお父さんはそんなお母さんに振り回されてる。私はこの掛け合いは嫌いじゃない。

「でもマジで神谷晴人がいるんだもん。誰でもビックリするよ。なんでうちにいるの?」

炒飯を食べ終わり、麦茶を飲んで一息つく。

「ドラマの撮影だね。なんでもこの島が舞台らしい。」

お父さんが炒飯を食べながら説明してくれる。

「じゃあ航太が言っただのは本当なんだ…」

「航太が？」

「うん、航太が…って、あー!!!」

「なんだ!どうした?」

二人が私の大声にビックリしている。

「航太と賭けしたの忘れてた!」

両手で頭を抱える。そう、神谷晴人に会えたはいいが、会えたのに驚いていて賭けのことをすっかり忘れていたのだ。

「賭け?」

お母さんが聞いてくる。

私が負けて、航太の家の酒屋を手伝わなければならないということのため息まじりに説明した。

「だって来るなんて、これっぽっちも思わないじゃん。」

「なるほどなあ…確か役場が町起こしの一環でテレビ局に頼んだのが切っ掛けだから情報が漏れたんだろうな。航太は確信犯だな。」

笑いながらお父さんが残念だったなと肩を叩いてくる。

「うちの宿が選ばれたのは、静かなのと海が近いからだそうだ。それと、さっき部屋にいたおじさんが神谷晴人さんの事務所の副社長

「さんで、若い方がマネージャーさんだ。」

話を聞いていると、ドラマの撮影自体は来週からで主演の神谷晴人は休養も兼ねて先に現地入りしたらしい。本来なら最終の便で来るはずが、予定が早く終わった為に午前中の便で来てしまったのだという。

こんな有名人がプライベートで泊まりにくるなんてバレたら大騒ぎになるということで、お父さん達は今日まで内緒にしていたみたいだ。それで本当なら私は学校から帰ってきたらこの事をお父さんから聞く予定が、どうやら早く到着してしまったので言いそびれてしまった為に、ならこの際サプライズにしようとお母さんが思いついたみたいだ。思いつくのは自由だが、私にしてみたらいい迷惑だ。

一通りの説明が終わって三人でテーブルを囲んでると、玄関から大声が聞こえ何事かと思いい席を立った。

「かつ神谷晴人?!」

台所から駆け付けると、玄関の引き戸を開けたままで、さっきの私みたいに固まって大声を出したのは、弟の春生^{はるな}だ。…私は声も出なかつたけどね。ちなみに弟と言っても正確には従弟だ。私と同じで中学生の春生も今日から夏休みで民宿の手伝いをする事になっている。

この状況から察すると、春生も知らなかったみたいだ。おそらく玄関を開けた所で鉢合わせたのだろう。神谷晴人含め三人は靴を履いて出かけるところみたいだ。

「なんでここにいるの?!」

春生は神谷晴人に指をさしてまた叫んだ。その頬は興奮しているのか真っ赤だ。

「春生、おかえり。今日から1ヶ月滞在のお客様だよ。挨拶しなさい。」

お父さんが間に入り声をかける。

「俺、すごいファンなんです！CDも持ってるし！ドラマも見えます！」

多少顔は強ばってるが、大ファンの神谷晴人が目の前にいるから、テンションが上がりまくっている。

「君が春生くん？それはありがとう。今日からお世話になります。神谷晴人です。よろしくね。」

神谷晴人がにっこりと微笑んでとても優雅に春に手を差しだした。春生もそれに応えた。

「よっよろしく！」

春生のそこそこイケメンだから、がちり握手してる二人は写真に収めたいくらいやたら絵になった。

「こら春！よろしくお願いしますでしょ？」

お母さんが怒る。

「いいですよ、僕も気楽なほうがいいですから。」

と言いながら、神谷晴人が振り向いた。その後ろでは春生がほらみ
ると言っている。そして神谷晴人は台所のドアの前で立っている私
とお母さんを見つけた。

「明希ちゃん！」

「は、はい?!」

まさかまた名前を呼ばれるとは思ってなかった私はまた声が裏返っ
てしまった。

履いてた靴を脱いで神谷晴人は私に向かって歩いてくる。さっきの
場面がフラッシュバックされて、思わず体が固まってしまう。私は
咄嗟にお母さんのTシャツ袖を掴んだ。

「ゴメン！」

「え?」

一瞬何が起きたか分からなかった。私の目の前で神谷晴人が頭を下
げているのだ。

お父さん、お母さんに春生も何事かと驚いている。

「あ、の...?」

その行動が理解できなくて、何て言えばいいのか分からない。
私が戸惑っているのが分かったのか、神谷晴人は顔を上げて私を見
つめた。

「さつき笑っちゃって、ゴメンね！失礼だね、初対面の女の子に本当にゴメン！傷つけちゃったよね？」

一瞬何のことか理解できなかった。それもそのはずで私は確かに笑われたが、傷つけられたなんて思ってなかったからだ。

「あの…こちらこそ失礼なこととしてすみませんでした。」

私も頭を下げた。

「えっ？」

今度は神谷晴人がポカンとしている。

「どうして明希ちゃんが謝るの？何も失礼なことしてないよ？」

「いえ、あの、なんて言うか…挨拶もまともにしなかったから…」

「明希姉、またドジしたの？」

神谷晴人の後ろで、春生がニヤニヤ笑いながらこっちに野次を飛ばしている。

「またって何よ？それにドジじゃないし！」

つい言い返してしまう。

「コラ！やめなさい、二人とも！お客様の前で！」

お母さんの仲裁が入る。これもまた新垣家の日常茶飯事だ。春生が

私にちよっかいを出して、お母さんが間に入る。いつもならスルーしてるが、今日はつい言い返してしまった。

なぜなら神谷晴人にドジだと思われなくなかったから。

ふと視線を感じて辿ってみると、神谷晴人が口とお腹を手で抑えて肩を震わせている。

「あの？」

「…アハハ、本当に面白いね。仲のいい姉弟だね。」

そう、何が面白いのか分からないけれど、またツボにはまっていたのだ。

仲のいい姉弟…私と春生は彼の目にはちゃんと姉弟に見えるようで、どうやら私たちは気に入ってもらえたみたいだ。

「僕にも姉がいるんです。明希ちゃんと春生くん見てたら思い出しちゃって、つい…」

二人を見てたら嫁いで行った姉を思い出した。

こんなに素直に笑ったのはどれくらい前だろう…って考えるくらい、最近では笑ってなかったことに気付いた。もちろん仕事で笑うことはある。マネージャーや副社長も一緒にいるけど、今は全くのプライベートだ。

明希ちゃん…会って数分で俺を二回も笑わせてくれた子。こんなに興味をそそられるなんて初めてだった。

「神谷くんがこんなに笑うのは初めて見るな。」

と、白髪の叔父さん。この人が副社長さんだ。

「そうですね、副社長。」

今度はマネージャーさんも頷いている。

「えっ！そんなに笑ってない？」

そんな二人の言葉に神谷晴人が驚いて笑っている。

その笑顔に私は違和感を覚えた。どこかで見たような気がしたから、遠い昔に…

「そうそう、紹介が遅れたんだけど、こちらがうちの事務所の副社長の安西さんと僕のマネージャーの山崎くん。」

簡単に神谷晴人が後ろの二人を紹介してくれ、よろしくと声をかけてくれた。

(山崎？どこかで聞いたような…)

どこかで聞いたことある名前に、私の頭の記憶を辿るが思い出せないでいた。

「明希ちゃん、というわけで1ヶ月お世話になります。」

神谷晴人が手を差し伸べている。どうしようか戸惑っていたら、お母さんがほらと肩をたたいてきた。私もおずおずと手を出した。

ギュッ

固く握手された私の手は強く、それでいて優しく男の人の手に包ま

れていた。異性と握手するなんて初体験だ。
その初めてが神谷晴人で夢じゃないかと思うくらいの出来事だった。
思わず顔を見てポーっとしてしまう。

「明希ちゃん？」

でもその時の彼女の笑顔は心の底から可愛いと思った。
とりあえずお互いのわだかまりが溶けた所で俺たち三人は外へ出た。
彼女の笑顔に見送られて…

私も彼らを見送り、制服から着替える為に部屋に向かった。お父さんから手伝いは夕方からでいいと言われたので、それまで部屋で休もうと思った。

制服からTシャツとショートパンツに着替えた私はベッドにゴロンと横になる。

ベッド脇のサイドテーブルには昔に撮った家族写真が飾ってある。
その写真に向かってその日の出来事を話すのが日課だ。

私はうつ伏せになり写真を手に取った。

「ママ。今ね、すごい人に会ったの。誰だと思う？芸能人の神谷晴人だよ！ホントにビックリだよ。まさか芸能人に会えるなんて思わなかったよ。」

写真の中で、麦わら帽子をかぶってピースサインをしている小さい女の子二人と、真っ白いワンピースに女の子と同じ麦わら帽子をかぶって寄り添って優しく微笑んでいる女性。私のママと妹だ。目元が姉妹だけあってお母さんに似ている。小さい頃にこの島に遊びに

来て撮った写真、私のお気に入り。

「そう！それにね！神谷晴人と握手しちゃったんだ。私、男の人と握手したの初めてだよ。…ママは、いつ初めて男の人と握手したのかな？」

写真を持ったまま寝返りをうって仰向けになる。ベッドの上の窓から風が入りカーテンがなびいていた。

コンコン…

「ん…」

コンコン…

誰かがドアをノックしている。私は微睡みの中にいた。どうやらあれから寝てしまったようだ。写真たてを元の場所に戻して、ベッドから体を起こす。

「明希？入るぞ？」

お父さんが部屋に入ってきた。

「なんだ寝てたのか？」

「…そうみたい…」

まだボーっとしている頭をふる。

「それで何か用事？」

「あつ！そうだった。酒屋に行つてコレ買つてきてくれ。」

はい、とかお父さんにメモを渡された。

「分かった。ついでに咲恵の所に寄つてきてもいい？」

「いいけど、神谷さんのことはまだ言うなよ！それと夕食まで時間ないから早くな。」

お父さんにくれぐれもと言われて、私は外に出た。
夕暮れ前だというのに太陽は燦々と輝いている。

うちの民宿から15分くらい歩いた所に咲恵の家がある。彼女の家は居酒屋を運営していて、うちに泊まるお客さんも利用している。
ガラッと入り口を開けると、咲恵のおじさんがカウンターで支度をしている。

「おじさん、こんにちは。咲恵いる？」

「おう、明希ちゃん。咲恵なら上にいるよ。」

ありがとうとお礼を言って、私はサンダルを脱いで二階の階段を上った。

コンコン

「はい。」

「私。入るよ？」

ドアを開けると咲恵はベッドに寝転がって雑誌を読んでいた。

「明希、いらっしやい。何か飲む？」

そう言つと、ベッドから出て私の方へ歩いてきた。

「ううん、いらない。これから航太のところに寄つてお酒もらわなくちゃいけないから、すぐ帰らなくちゃいけない。」

「そうなの？残念。」

そう言つて肩をすくめる。

「咲恵、どうだった？進路相談。」

私達はベッドに座つた。

「今のところ、合格圏内だつて。」

咲恵は、沖縄の大学に進学する予定だ。

「そっかあ…いいなあ。」

思わず本音が漏れる。

「明希は？」

「かなり頑張らないと厳しいって。」

咲恵は私が東京の大学に行きたいのを知っている。

「そっかあ、でも明希なら大丈夫だよ。一緒に頑張ろう？」

咲恵はいつも私が自信がない時にこうして励ましてくれる。私のかげがえのない親友だ。

「そういえば、明希。30日はちゃんと空けといてよ？」

30日：私の誕生日だ。咲恵が企画してくれて毎年楽しみにしている。

「うん、大丈夫。お母さん達には言ってるから。」

「17時にはうちに来てね。」

「分かった。楽しみにしてるね。」

私と咲恵はお互いの顔を見て笑い合った。

「それじゃあ、帰るね。」

そう言い私は咲恵の家を出て、航太の家が経営する酒屋へ急いだ。

「こんにちは。」

島の商店街にある酒屋は夕暮れの買い物客で賑わっている。

「よう、明希。買い出しか？」

店の奥から私を見つけて航太が声を掛けてきた。

「航太、これある？」

お父さんからのメモを航太に渡す。

「あるけど…お前これ歩いて持って帰るのか？」

「えっ？なんで？」

「なんでって、これ七本って書いてあるのに。お前歩いてきてるか
ら。」

私達はお父さん手書きのメモを見た。1か7か正直、私はずっと1
だとはかり思っていた。だから歩いてきたのだ。

「…お父さんに確認してみる。」

ポケットから携帯を出してお父さんに電話をかける。するとほとん
く繋がった。

「もしもし?どうした?」

「もしもし。メモのお酒の本数だけど…一本?七本?」

「あれ?七本って書いてなかったか。」

「…」

「明希?どうかしたか?」

「あつ、ううん。何でもない。それじゃあ。」

電話を切って航太のほうを振り替える。

「どっちだつて?」

「七本だつて…」

ずっと一本だと思ってた分、凄く恥ずかしい。

「アハハ!お前たまにドジするよな!」

航太がお腹を抱えて笑っている。今日は凄く笑われる日だ。

「でもどうしよう…七本も持って帰れないよ。」

そう一本ならまだしも一升瓶を七本も持って歩けるほどの力は私にはない。

「仕方ねえなあ。俺が持つてってやるよ。」

「マジで？助かるよ、ありがとう。」

「親父！ちよつと明希んちに配達してくる。」

レジにいる叔父さんに声を掛けると航太は自転車の荷台に酒瓶をくくりつけた、私たちは並んで歩きだした。

「そう言えば、賭けの話なんだけど…」

「そついや、お前進路決めたのか？」

私の言葉を遮って、航太が唐突に切り出した。まだ航太には言っていなかった。

「賭け？ああ、昼間の？それよりおまえの進路だ。決めたんたる？」

「…」

航太に進路の話をしたくなかったから、急いで話題を変えたかったが無理みたいだ。

「お前、咲恵には言えても俺には言えないのかよ。」

ジロリと睨まれる。航太の言葉に胸が痛い。航太には言い出しにくい理由があった。

「あの航太、私…」

「あれ？明希ちゃんじゃない？」

商店街を抜けて海岸沿いの通りを歩いていると、後ろから名前を呼ばれた。この声には聞き覚えがある。

振り向くと、数メートル後ろをTシャツにジーパンとキャップを深く被ったラフな格好の神谷晴人が一人で歩いている。

そう、私が彼を見たのは昼過ぎで三人で出かける所だ。その時とは服装も違うし、雰囲気も…なんていうか気取ってない感じだ。

私を見つけた神谷晴人は私だと分かると駆け寄ってきた。

「か、神谷さん？なんでこんな所に？」

「やっぱり、明希ちゃんだ。良かった、間違ってたなくて。今ちよつと散歩してたところ。」

隣を見たら航太がビックリしている。

「なんで？神谷晴人が？」

航太が驚いている間に、神谷晴人は私たちの目の前まで来ていた。

私は航太にどうして神谷晴人がここにいるのかの事情を話すと、航太はほらみると私を睨んでいる。

「なら俺の勝ちだな！俺の言葉に嘘はなかっただろ？」

「なに？何の話？」

会ったばかりで神谷晴人事態どんな人が分からないが、人見知りをしないのとかかなり気さくな人なのは確かだと思う。

私ならまず無理だ。特に年上の男性なんて、何を話していいかも分

からないから緊張してしまう。

「実は…」

と、神谷晴人が来ると噂になっていて、航太と賭けをしていたことを説明した。

「で、明希ちゃんが負けたの。ふうん。あっ！だからあんなにビツクリしたの？」

ニヤリと笑われながら顔を覗きこまれる。目の前に神谷晴人の格好いい顔があつて、またビツクリする。

私には、彼氏がいた経験がない。要は男友達程度なら航太もいるから免疫はあるが、友達でも家族以外の男の人には免疫がないのだ。正直、今もここから逃げたいくらいだ。

「…そうです」

「何か、あつたのか？」

航太に話すと笑われるから、何でもないとごまかす。

「それじゃあ、え〜っと…」

「航太です！金城航太！」

自転車を押しながら航太は張り切つて答える。春生といい航太といい、芸能人相手に緊張はしないのだろうかと思つた。

「航太くんね。俺がここにいること、黙つててくれない？」

変わったお願いに、私と航太は目を合わせる。

「撮影が始まれば嫌でも目立つと思うんだけど、それまではオフだからゆっくりしたいんだ。だから、今の俺は芸能人の神谷晴人じゃなくて、ただの神谷晴人ってこと。」

シーッと形のいい唇の前に、これまた綺麗な長い人差し指が内緒ねと言ってくる。

うんうんと首を縦に振ってる航太も私と同じことを思ったに違いない。

そんな私達を見てから、神谷晴人が切り出した。

「ところで、航太くんは明希ちゃんの彼氏？」

見事な直球の質問に、航太と顔を見合わせる。同時に笑いも込み上げてきて我慢できない。

「「ないない！絶対ない！」」

二人して、手を振って否定する。

「航太はただの幼なじみです。」

「ただのって何だよ？」

「そうなの？仲良く歩いてるから恋人同士かと思っちゃった。」

「違いますよ。ホントに幼なじみです。それに航太はこれでも彼女

いるんですよ。」

私は航太を指さして捕捉する。

「お前、これでもって何だよ？」

「航太がこれでもじゃないなら何だっていうのよ！」

神谷晴人が隣にいと云うのに、私達は売り言葉に買い言葉でギャーギャー騒いでいる。

「ハハ…若いつていいな。俺も学生時代に戻りたいな。」

その言葉に言い合いを止めて神谷晴人の顔を見ると、瞳は遠くを見ていてどことなく寂しげだ。

それでも格好いいと思うのは、彼が芸能人だからだろうかと思った。

「神谷さんだって、十分若いじゃないですか？」

珍しく航太が相手を気遣っている。

「俺？」

コクンと二人で首を立てに振る。

「君達から見たら、もうオッサンだよ。今年で34だし。」

「えっ?!」

思っていた年齢よりかなり上だったので、ビックリして声が出てしまった。だけど、叫んだのは私だけだ。航太は叫んだ私にビックリしている。どうやら神谷晴人の年齢を知らないのは私だけみたいだ。

「知らなかったのかよ、明希…」

呆れた感じで私を見る航太の視線が痛い…

「…うん。28くらいかと…ていうか、なんで航太が知ってるのよ？」

失礼かと思つて、航太とコソコソ小声で話す。

「お前、女のくせに雑誌とか見てないのかよ。年齢隠してないから、プロフとかにちゃんと出てるぞ…」

「だって、神谷晴人なんてそこまで見ないし…」

そう、私は神谷晴人というよりはそういう情報まで興味がないのだ。

神谷晴人は、ちゃんとお手入れをしてるのか、ベビーフェイスだから見た目ではかなり若く見える。

相手が有名人で現代がネット社会だけに、自分が知らないのはなんか複雑な気分だ。しかも本人が目の前にいれば尚更だった。

「それは残念。俺もまだまだ頑張らないとね。」

ハハッと笑う神谷晴人に、私は苦笑いしかできなかった。

そんな他愛ない話をしていると、あっという間に民宿に着いた。

航太が荷台からお酒の入ったケースを下ろす。

「明希、これ裏口でいいよな？」

「うん、お願い。お父さん、厨房にいるから。」

おう、と返事して航太はお酒のケースを持って裏へ回ってしまふ。

「…幼なじみかあ…」

「え？」

その声に振り向くと、神谷晴人の顔はなぜか悲しそうだ。

「あの？どうかしましたか？」

私の言葉に我に返った様子の神谷晴人は、またにっこりと笑顔を浮かべて、何でもないと行ってきた。

「そうですか？」

何でもないようには見えないが、そこまで親しくない以上、本人が何でもないと言うからには私も何も言えない。

「…この海はキレイだね。」

うちの民宿からはどこからでも海が見える。それを眩しそうに眺め

て神谷晴人が呟いた。

「はい。私は大好きです。」

明希ちゃんの大好きという言葉に海から視線を外すと、彼女も海を眺めて幸せそうに微笑んでいる。

「こんな所で育った明希ちゃんは幸せだね。」

「…そうですね。」

見逃さなかった。明希ちゃんの一瞬の暗い顔。でもすぐに元のお日さまみたいな笑顔に戻った。

「そういえば、もうすぐ夕食ですよね？早く中に入りましょう。」
「なんだろう？このモヤモヤした感じ。俺は明希ちゃんのことを初対面の時から気に入ってるのは確かだ。」

その明希ちゃんの笑顔が今は痛々しく見える。明希ちゃんのその笑顔の裏には何かが隠されている。

「…そうだね。歩いたからお腹すいたよ。」

ここはスルーしよう。今はまだ聞いてはいけない。その方がいいと感じた。
すると明希ちゃんはニコツと笑ってくれた。俺の知ってる太陽のような笑顔で。

神谷晴人はそれじゃあとと言って、部屋に戻って行った。私はそのまま台所へ。

台所へ行くと、お母さんと春生が料理を盛り付けていて、航太がお父さんから伝票にサインをもらっていた。

「はぁ…」

思わずため息が漏れる。

私に気付いた三人がおかえりと声をかけてくれた。

「何？ため息なんかついて。珍しいわね。」

お母さんが手を止めて私を見る。航太もお父さんも春生も。その視線に耐えかねてわけを話した。

「なんか色々あつて疲れちゃって。芸能人つてもう少し気取ってるのかと思った。神谷晴人つてなんていうかイメージと違う…」

春生がニヤニヤ顔で私を見ている。

「何？ニヤニヤして？」

「明希姉さぁ…一目惚れでもしたの？」

「ひっ、一目惚れ?!」

自分でも考えてなかった言葉にビックリする。

「何？凶星？」

「はぁ？そんなわけないじゃない。」

春生の言葉を一喝して、私も民宿の名前が入ったエプロンを手に取ってつける。

「確かにイケメンよね、神谷さんは。明希が本気なら、お母さん応援するわ。」

「はあ？お母さんまで何言ってるの？そんなの違ってるって言うてるでしょ？」

もうっ！と怒って、私も盛り付けを手伝い始める。

「明希、いくら彼氏いないからって現実見るよな。賭けのこと忘れんなよ！じゃあ、帰るわ。」

気分良く手伝いたかったのに、航太の言葉にカチンとくる。しかも、いい逃げだ。信じられない…

「明希、手伝いはほどほどにして勉強しろよ？」

お父さんはなだめるように話し掛けてきた。

「うん、コレやったら部屋に戻るよ。」

俺は明希ちゃんと別れて部屋に戻った。広くはないけど、琉球豊の和室は上京したばかりに住んでたアパートを思い出す。

客室の窓を開けると、夏の風が入り込み一面の海が見える。
俺は一目でこの景色を好きになった。

コンコン

「はい。」

ドアを開けるとマネージャーの山崎くんが申し訳なさそうな顔で立っている。

「あの晴人さん、お話が…」

「どうしたの？」

あんまりにも不安な表情にこっちが逆に不安になる。

「実は、一度東京に戻らないといけなくなっちゃって…」

「えっ！俺？」

「いえ、僕だけです。」

その言葉を聞いてホツとする自分がいるのに気付く。

訳を聞くと、どうしても事務処理をしなくちゃいけないらしく東京に戻れと言われたらしい。俺は一応休暇という扱いだから、そのまま残ってもいいらしいんだけど、あんまり目立たないようにとのこと…こういう時、自分の職業が恨めしく思う。

「そういうわけで、副社長の明日帰京に合わせて僕も帰ります。ので！くれぐれも目立つ行動は避けて下さいね。」

「はいはい。」

「晴人さん、返事は一回で大丈夫です。あと呑み過ぎにも注意してください。」

今年の春に俺の担当になった山崎くん。まだ26歳なのに、俺より人間が出来ている。こんな風に気遣ってくれると、俺の彼女みたいだとたまに思う。でもそれもマネージャーの仕事の内なんだけどね。

「分かってるよ。撮影もあるんだし、羽目は外さないよ。」

「約束してくださいよ？」

俺の私生活が不摂生なのを知っている彼の目は、疑り深く俺を見ている。

「約束するよ。」

そう言うと、彼の顔に笑顔が戻った。

その後、副社長を部屋に呼びに行き夕食を食べに下の階の食堂へ行った。

食堂へ着くと、テーブルに伝統の郷土料理が並べられていた。席につくと、奥から美佐さんが泡盛を持って出てきた。

「これ、美味しいんです。どうぞ飲んでみてください。」

「そんな気を遣わないでください。」

と、副社長。でも顔はまんざらでもない感じだ。その満足気な顔を

見て、美佐さんも水割りを作り始める。

俺は、周りに他のお客さんもチラホラいるなかで、ご主人と春生くんの姿はあるが明希ちゃんがないことに気付いた。

そうそう、他のお客さんがなんで俺に気付かないかというところ眼鏡をかけてるから。これだけでも案外バレない、複雑だけだね。

「美佐さん、明希ちゃんは？」

「明希なら、部屋で勉強してますよ。」

「勉強？」

「あら、言っただけでなかったでした？明希、ああ見えて受験生なんですよ。」

「え？そうなの？」

それは大変だと、副社長や山崎くんは首を立てに振って頷いている。てつきり夕食時にはまた会えるだろうと思っただけに、シヨックを受けてる自分がいる。自分でもここまで明希ちゃんを気にしている理由がよく分からないでいた。

「なんだ、神谷くんはあの子がお気に入りみたいだな。」

水割りを飲みながら目ざとく副社長が聞いてくる。

「珍しいですね、晴人さんが会ってすぐの子を気に入るなんて。」

今度は山崎くんだ。

「そう?」

自分で言うのもなんだが、俺はそこそ格好いいからファン層も女の子が多い。遊ぶだけの女なら、コネを使えばいくらでもいる。だからいつもは初対面の女の子にはあんまり興味がない。

でも、二人が言っただように当人の俺でさえ明希ちゃんを気に入ってる理由が分からない。だから何て答えていいか分からなかった。

「女将、あの子をスカウトしたらだめかね?」

副社長が突然切り出した。確かに明希ちゃんは、そこら返のアイドルよりは可愛いし、身長もあるからスタイルもいい!芸能界に入れば売れると俺も思う。でも…

「いいお話ですが…どうでしょうか?」

美佐さんが困った顔をしていて、その顔は見るに明らかだ。芸能界に入れるつもりはないと言っている。

「良かったら本人と話をさせてください。彼女なら売れること間違いない。」

副社長がまだ引っ張っている。あながち冗談で言い出した訳じゃないらしい。

「ですが…」

「まあまあ、副社長。話が急ですし、今日の所は飲みましようよ。」

困り果てた美佐さんを見兼ねて助け船を出した。
渋々納得した副社長は箸を手に持ち郷土料理を食べ始めた。

向かいの席の俺と山崎くんはホツと息を吐いた。

「それじゃあ何かあれば声かけてください。」

そう言つて美佐さんは奥の台所へ戻っていく。

俺たちも美味しい泡盛と料理に舌鼓を打ち、その日の夜はふけていった。

机に広げた問題集から目を外して時計を見たら、夜の11時を回っていた。夕飯を軽く済ませただけの私のお腹は何か食べたいと鳴っている。背伸びをして固まっていた筋肉を伸ばすと、背骨がポキッと軽い音を立てた。

「…お腹減つたな。」

階段を降りて台所へ。

冷蔵庫を開けると小さめのおにぎりが二個入っていて、ラップにメモが貼つてある。

『お疲れさま』

お母さんの文字にっこり笑ってしまった。

私が夜、勉強をするようになってからの夜食には、必ず一言添えてくれる。

レンジで温めてる間にコップに麦茶を注ぐ。

ふと後ろで空気が動いた。

ポンッと肩を叩かれ、持っているコップを落としそうになった。

「!?!」

振り向くと、春生となぜか神谷晴人まで一緒にいる。

「何してんの？明希姉。」

今日何回目のビックリだろう…驚く私を余所に二人はキョトンとしている。

「な、何って、お腹すいたから夜食を食べようと思って…春生は？それに何で神谷さんまで？」

春生だけならまだしも、神谷晴人までいると変に緊張してしまう。

「俺も腹が減ったから降りてきたら、晴兄に会ったからさ。」

…晴兄??

「実は俺も小腹がすいちゃって。コンビニにでも行こうとしたら、春生くんに会ってさ。カップ麺なら作れるって言うから、ついてきちゃった」

ついてきちゃったと可愛く言われると、自分だけおにぎりを食べる

のが気が引ける。それに、一応お客さんの夜食にカップ麺なんか出せない。

「何か作りましょうか？」

「やったね、晴兄！」

「明希ちゃんの手料理かぁ、楽しみだね。」

と、二人は仲良くガッツポーズしている。何だか本当に兄弟に見える。

棚の中に沖縄そばのインスタントが入っていたのでそれにする。鍋に水を入れて火にかけた。

「それなら少し待っててください。ところで、春生。晴兄なんてお客様に失礼でしょ？」

春生をジロリと睨む。

「なんで？晴兄がそう呼んでいいって。」

そう自慢げに言ってくる。聞くと、夕食の時に二人は意気投合して春生が、兄ちゃんがいたら神谷さんがいいという一言から始まったらしい。

「だからって…。」

「いいんだよ、明希ちゃん。これから1ヶ月もお世話になるわけだし、俺も堅苦しい敬語とかは苦手だしね。良かったら明希ちゃんも、晴兄って呼んでよ。」

「…いや、それはちょっと…」

私の言葉を遮って、神谷晴人が言う。本人から言われると、私も反論できない。でも、私は春生みたいに神谷晴人を晴兄と呼べなかった。

沖縄そばを作り終わると、二人は仲良くテーブルに座って待っている。

「はい、どうぞ。」

テーブルの上に沖縄そばを二つ置く。

「わあ、美味しそう。いただきます。」

そう言って神谷晴人は麺をすする。春生はすでにガツガツ食べていた。その様子を見て、私もおにぎりを食べる。「そういえば、晴兄聞いてよ。」

「何？」

「明希姉がね、一目惚れしたんだってさ。」

ゴホっゴホっ！

春生の言葉にビックリして、飲んでいた麦茶が変な所に入ってしまった。

「春生！」

「明希ちゃんが一目惚れ？誰に？」

神谷晴人は興味津々だ。

「それはね〜…」

意味深に春生が私を見る。その春生を睨んだ。

「春生！」

「誰？誰？」

私を余所に二人はすごい盛り上がっている。

一目惚れなんかしてないけど、その相手が神谷晴人だと言われたらどうなるか知れたものじゃない。こうなったら、最後の手段だ。

「春生。それ以上言ったら、真由ちゃんにあんたの一番恥ずかしい話バラすわよ？」

「え？！それはやめてよ！明希姉！」

春生の顔色が変わる。これがいつも春生を黙らせる手段だ。ちなみに真由ちゃんは春生の彼女だ。

「なら、さっきの話もナシよ。大体一目惚れなんてしてないって言ったじゃない」

「え〜。聞きたかったのになあ…」

神谷晴人は本気で残念がっている。

「そもそも一目惚れなんてしてないですから！」

「もしかして、俺だったりして？」

神谷晴人がおどけて言うてくる。ドキッと心臓が嫌な音を立てたけど、悟られるわけにはいかない。

「まさか、芸能人相手に一目惚れなんてしないですよ」

「……」

一瞬、神谷晴人の顔が曇った。

しまった！と思ってても、つい出てしまった本心は時すでに遅かった。

「だよねえ？冗談だから気にしないで。」

いつもテレビで見ていた笑顔で冗談だと言う神谷晴人。その笑顔とは裏腹に声は少し切なく聞こえる。

「……すみません。」

多分、傷つけた。いくら恋愛経験がなくてもそれくらいなら私にも分かる。

でも、この時はなぜ傷ついてるのかという理由を私はまだ分からなかった。

なんとなく気まずい雰囲気になった中、神谷晴人は片付けると言うてくれたが相手はお客さんだ。片付けなんてさせられないから、大丈夫だと言って部屋に戻ってもらった。

彼は、ごちそうさまと言って渋々だが戻ってくれた。

神谷晴人が台所を出たことを確認すると、春生が謝ってきた。さすがの春生もしまったと思ったのだろう。

「明希姉、ゴメン！」

私も春生に悪気はないことは分かっているが、ついたため息が出てしまう。

「いいよ、春生が悪いわけじゃない。」

「明希姉……」

「ほら、早く片付けて寝よう？」

暗い顔をした春生を促す。私は食べ終わった器を流し台へ持っていく。

「そういえば、明希姉。バイトの話聞いた？」

「バイト？」

二人で並んで片付けをしていると、春生が思い出したかのように話しました。

「明希姉が今年は受験で忙しいから、夏の間だけ雇って話だよ。」

「え！そうなの？」

神谷晴人の分の器とおにぎりがのってたお皿を洗っていた手が止まる。

「私、いつも通り手伝うつもりだったのに…」

「明希姉？」

つい、呟いてしまった言葉に春生が心配そうに顔を覗きこんでくる。

「ううん。なんだ、バイト雇うならちよっとは遊べるね。」

「遊んでないで勉強しろよ。」

なんて冗談言いながら、今日は終わっていった。

ピピピピピ...

枕元で目覚ましが鳴っている。私は手を伸ばしてそれを止めた。薄ら目を開けると、時計は午前五時をさしている。正直、昨日は色々なことがあってすぐ眠れなかった。

モソモソと起き上がってカーテンを開けると、目の前の海はすでに朝日で輝いていた。今日も天気はいいらしい。胸一杯に朝の空気を吸い込む。

(ちてと...)

私は着替えて台所へ向かう。お客さんの朝食作りを手伝うのが私の朝の仕事だ。

「おはよう。」

すでに台所に立っているお父さんとお母さん、それと朝食だけ作りに来てくれる離れに住んでるお祖母ちゃんに声をかける。

「おはよう。」

と、お父さん。

「おはよう、明希。」

と、お祖母ちゃん。お祖母ちゃんはお父さんのお母さんで、私とは血が繋がっていない。だけど、本当の孫のように可愛がってくれる。

「おはようって、明希クマができてるよ？寝れなかったの？」

「えっ！ウン？」

お母さんに言われて、つい目の下を触ってしまっ。

「そんな気にしなくても、明希は可愛いよ。」

とお祖母ちゃんがフォローしてくれる。

「お祖母ちゃん、手伝っよ。」

お祖母ちゃんの隣に立って、料理の盛り付けを手伝うとお祖母ちゃん
はニッコリと笑ってくれた。

「そつだ、お父さん。」

「何だ？」

魚を焼きながら返事だけが返ってくる。

「バイト雇うの？」

「ああ、明希にはまだ言っていなかったか？今年も勉強しなきゃいけ
ないだろ？母さんと話して夏の間だけ雇うことにしたんだ。」

「うん、春生から聞いた。」

「なんだい？浮かない顔して。」

お祖母ちゃんにはお見通しのようだ。見るとお父さんもお母さんも
心配そうにこつちを見ている。

「うづん、何でもないよ。」

「そつか？今日の昼には着いて明日から働いてもらうから、明希も
勉強に集中できるぞ。」

「…そつだね。」

笑いかけてくるお父さんに、私は何も言えなかった。

私だってバイトが来てくれるのを嫌がってる訳じゃない。

私が本当の家族じゃないから、負い目を感じさせないように皆が私を一番に考えてくれていていることはよく分かっている。

バイトのことも、私の受験がすごく難しいから勉強に専念できるようにと配慮してくれたことも、言われなくても分かっている。

でも、それが逆に辛いというか…気を遣わせすぎてる感じがして嫌に思う自分があるのだ。

「明希、言いたいことがあるなら言わなきゃ伝わらないよ？」

お祖母ちゃんが優しく声をかけてくれる。その言葉に涙が出そうになる。

「何だ？何かあるのか？」

お父さんがキョトンとした顔で聞いてくる。

「あの、バイト雇っても…朝の手伝いは続けたいんだけど…」

「だけど勉強も大変なんだろう？大丈夫なのか？」

「うん！大丈夫！ちゃんと夏期講習も行くし、遊ばずに勉強するか」
「ら」

「そこまで言うなら…」

私の勢いにお父さんはちょっとビックリした様子だったが、了解してくれたみたいだ。

お祖母ちゃんがこっそりよかったねと耳打ちしてくれた。

朝七時。

ぐっすり寝れたかと聞かれると寝れなかった…

なぜなら、明希ちゃんの一目惚れの相手が誰か分からなかった。

あれから、一人部屋に戻って考えて見たけど、春生さんの口振りは自惚れじゃないけど、俺だとばかり思ってた。だからまさかあんなこと言われるなんて考えてなかった。大抵の女の子なら俺が気になつて仕方ないはずなのに…こんな感じで考え込んでたら、何時の間にかやら寝てしまったらしい。

それでもいつもより目覚めがすっきりしているのは、ここが東京じゃない青い海に囲まれた離島だからだろうか…なんて、朝から物思いに耽っていると、誰かがドアをノックしてきた。

「晴人さん、起きてますか？」

やっぱり山崎くんだ。

「起きてるよ。」

と言いながらドアを開ける。すでに身支度を終えた山崎くんがトランク片手に立っている。

「朝食はできてるみたいですよ。僕と副社長は朝食を食べたら帰ります。晴人さんはまだゆっくりされてます？」

「ん、どうしようかな？」

正直少しゆつくりしたい気分だ。だけど、上司が帰るのを見送らない訳にはいかない。これでも雇われてる身だしね。

「一緒に食べるよ。」

また二人で食堂へ降りる。すると、彼女の姿がそこにあった。朝から明希ちゃんの姿を見れたのが嬉しいのか、喜んでいる自分がいるのに気付く。

明希ちゃんは、お客さんに朝食のお膳を出していて、俺たちに気付くと、困ったようににっこり笑って声をかけてくれた。どうやら、昨日のことを気にしてるみたいだ。

「おはようございます。」

明希ちゃんはその表情は、朝から変な考えを起こしそうなくらい俺には可愛くて仕方がなかった。

「おはようございます。」

隣で丁寧に挨拶している山崎くん。

「お、おはよう。」

自分でもおかしいんじゃないかと思うくらいなぜだか緊張している。別に女に免疫がないわけじゃないのに、明希ちゃんに対してはかなり神経過敏になっている自分がいるのだ。これじゃ、俺が一目惚れしたみたいだ。

(……………一目惚れ？俺が?)

「晴人さん？どうかしました？」

山崎くんの声で、自分の世界から帰ってこれた。

「なんでもない。」

有り得ない。一目惚れなんて…俺は、雑念を振り払った。

「おはよう。」

後ろから副社長がやってきた。

「今、ご飯持ってきますね。」

明希ちゃんはそう言って奥へ入っていった。

ここの食堂…というよりは畳が敷いてあるから大広間って感じなんだけど。ガラス戸がないからすごく解放感に満ちていて、海風も入ってくるから気持ちいい。

そんな中で三人席に座って間もなく明希ちゃんと美佐さんが朝食のお膳を持ってきてくれた。

「わー、美味しそう。」

昨日の夕食も思ったけど、ここの料理は最高だ。

「そういえば、女将。昨日の話は娘さんにくれたのかな？」

副社長が美佐さんに聞いている。どうやらスカウトは本気らしい…

美佐さんは困った顔をしているし、明希ちゃんは多分聞いてないの
だろう。何？って顔で美佐さんを見ている。

「お母さん、何の話？」

「それが…」

「それならちようどいい。明希くん、芸能界に興味ないかね？」

「は？」

昨日から明希ちゃんのビックリした顔を見るのは何回目だろう。大
きな瞳がさらに大きく開いている。

「あの？芸能界って？」

「そのままの意味だよ。うちの事務所に入って活躍してみないかい
？君ならモデルでも女優でも、十分に売れる素質はある。ちようど
夏休みなんだし、大学なんて行かずに受験なんかやめて、今からで
もモデルくらいからやってみないかい？」

副社長の強引な勧誘に、山崎くと俺は口が出せないでいた。悪い
人じゃないが、芸能事務所も言わば商売、利益に関しては貪欲なの
だ。

一瞬、明希ちゃんがうちの事務所に入ったら東京でも会えるかも…
なんて考えてたら、明希ちゃんの一言でこの夢は消え去った。

「…興味ありませんから。」

考える素振りもなくそれだけ言い残し、明希ちゃんは足早に行ってしまった。去つていく時の表情からは何か怒っているように思えた。副社長もさすがにここまで拒否されるとは思っていなかったのか、驚きを隠せない様子で、隣では山崎くんがオロオロしている。美佐さんもすみませんと言って明希ちゃんの後を追っていった。

「副社長、さすがに強引すぎなんじゃ…」

「神谷くんだって、あの娘のこと可愛いつて言ってたじゃないか。」

「確かに言いましたけど、それとこれとは違うような…それに本人が嫌なら仕方ないんじゃない。」

副社長はかなり本気みたいだ。こつ熱くなられると、他人の話に聞く耳を持ってくれない。

「私は東京に戻らなくてはならないから、神谷くん。」

「はい？」

「彼女の説得頼んだよ。」

「え！？俺が？」

思わず、声が大きくなってしまった。

「山崎に任せたいが、そうもいかないしな。大丈夫だ。神谷くんが笑って誘えばオツケーが出るだろう。彼女なら売れること間違いない。」

やけに自信たつぷりな副社長は俺に全てを託し、朝食を食べ終えろと山崎くんとタクシーに乗り帰っていった。俺が笑って明希ちゃんがなびいてたら苦勞はしてない。

(俺、休暇なのになあ…)

ため息が出そうなのを抑えて開け放たれた縁側に座って、ぼんやり海を眺めていた。

(明希ちゃん、怒ってたしなあ…)

無性にイライラしていた。

お客さんが食べ終わった器がガシャン、ガシャンと音を立てて食洗機に入っていく。

「明希は、何かあったのか？」

「それがね…」

流し台に立つ私の後ろで、テーブルに座ってお茶を飲みながら、遅めの朝食を食べてるお父さんとお祖母ちゃんがお母さんに聞いていた。

「スカウトされたあ？明希が？」

お父さんが驚いてる。

「明希は可愛いからね。」

お祖母ちゃんは染々頷いている。

「それで何で機嫌が悪いんだ？」

「それは…」

「あの人、受験なんか言って言ったの！受験なんか辞めて芸能界に入
れて！」

お母さんの言葉を遮り、大声が出てしまう。手にも力が入って、更
にガシャンと音が出た。

私の言葉を、困り顔で三人共黙って聞いている。皆私のやりたいこ
とを知っているからだと思う。

「向こうも悪気があったわけじゃないんだ。それに今日はもう東京
にもどるはずだから、明希が断ったなら問題ないだろう。」

お父さんが私をなだめる。

「そんなこと分かってるよ！」

最後の器を食洗機に入れ、ほぼお父さんに八つ当たりして、部屋に
戻った。

ベッドにうつ伏せになって、枕に顔を押しつける。

副社長さんに悪気がないのは分かっている。

だからって言い方というのものもある。生半可な気持ちで大学受験する人なんていないはずだから。

確かに芸能界に憧れてる女の子は、この世の中にたくさんいるだろう。でも私はちゃんとした夢があるから、そんな世界なんかでもない。人にはそれぞれやりたいことや夢があるのだ。そんなこと分からない人に、私の夢を「なんか」程度に言われて腹が立たないわけがない！

この苛立ちは中々消えてくれなかった。

咲恵に話したくても、神谷晴人のことが内緒になってるから言えないし、かと言って航太には大学受験事態が内緒になっているから無理だし…

でも誰かにこのイライラを何とかして欲しかった。

携帯でアドレスを見ていても、適当な人間がない。

「はあ…」

ため息しか出てこない。携帯を放り出し、ゴロンと仰向けになって天井を見た。

でも一向に気分が晴れることはなかった…

(…散歩でもしてこよう)

気分を変えないと、勉強にも手がつかなかった。

タンクトップの上にパーカーを羽織って部屋を出て玄関へ。サンダルを履いていると、春生が寝呆けた顔して階段を降りてきた。今まで寝ていたようだ。

「明希姉、どっか行くの？」

欠伸をしながら聞いてくる。

「…散歩。」

行ってらっしゃいと見送られて外へ出た。

太陽の光が目の前をキラキラ照らしていて、私のくすんだ心も洗ってくれるようだ。

民宿の目の前には海水浴場がある。

まだ朝が早いせいか、運良くそんなに人はいなかった。

ちようど砂浜とアスファルトの区切り部分に椰子の木が植えてある。その木陰に座ってコバルトブルーの水平線を何も考えずにただポツと眺めていた。

どれくらい時間が経ったのか、誰かに声をかけられた。

「彼女、一人？」

あまりにポーツとしていたせいか、現実に戻るのに時間がかかる。声のした方を振り向くと、知らない男が二人、私を見ていた。

(誰?)

「彼女、さっきからずっと一人だけど？」

「なんなら、俺達と遊ばない？」

イライラが少しずつ解消されていたのに、せつかくの気分転換がま

た台無しになってしまった。男達をよく見れば顔も格好もチャラチヤラしていてすごい軽い感じだ。おそらく観光客だろう。こんな南の島まで来てナンパしなきゃいけないのかと心底思った。ため息をついて立ち上がり、お尻についた砂をパンパンと払う。そのまま無視して民宿に戻ろうと思い、回れ右をして歩きだそうとした。

「おい、シカトかよ！」

「可愛いからっていい気になるなよ！」

男達が騒ぎ始めた。それでも無視して歩こうとすると、ガシッと手首を捕まれてしまった。男の手を振りほどこうとする。

「離して！」

「いいから俺達に付き合えよ。」

そう言つて男は掴んだ手首を勢いよく引つ張る。私はその力によるめいてしまった。そこをすかさずもう一人の男が私の両肩に手を置いた。男達はニヤニヤと私を見て笑っている。その顔を見ていたら、ひっぱたいてやりたくて仕方がなくなってきた。捕まれていない反対の手に力が入る。

「いい加減に…！」

「この子、俺の連れなんだけど。勝手に何してんの？」

「えっ？」

私の後ろから、別の声がした。私はこの声が誰だか知っている。神谷晴人だ。

私は振り向いて彼を見た。昨日同様にラフな格好でキャップを被っているだけだ。キャップを深く被っているせいで、表情までは読み取れない。

男達も見ているが、芸能人の神谷晴人だと気付いてないみたいだ。

「その手、離してくれない？」

今まで聞いたことない威圧的な声だ。

「なんだ？お前！」

男達は、突然現れた神谷晴人が気に入らないのか今にも殴りかかるうとしてる感じがした。

「かつ……」

神谷さんと言おうとしたら、手で制されてしまった。

「だから、この子の連れだからその手を離してって言ってるんだけど。」

につこり微笑んでいるが、声にはやっぱり威圧感がある。

「はあ?!」

神谷晴人の言葉にムキになったらしく、私の肩を掴んでいた男の手が離れた。

「走って!!」

「えっ!?!」

その瞬間にグイツと私の手が引つ張られた。神谷晴人だ。彼が男に捕まれていない方の手を握って走りだそうとしている。あまりに咄嗟のことで男が手を離し、その反動で足がよろめいてしまおうが何とか走り出すことができた。

「おい!」

「神谷さん?」

「いいから、今は逃げるが勝ちだよ!走って!」

走り出した神谷晴人に手を引かれて私も走り出す。後ろを向いたら男達も追ってきている。

「神谷さん、後ろ…」

「分かってるよ。」

どんどん景色が横に流れていく。今にも角を曲がりそうになっているが、あそこは行き止まりだ。ヤシの木の木陰から走りだしたはいが、神谷晴人はどこに行っているかわからない様子だ。それもそうだ、彼もある意味観光客だった。

「こっちです!」

彼を抜かして逆に手を引いて走る。とにかく走った。

ここら辺は海水浴場に平行に道路が走ってるだけで、あとはうちの民宿と数軒の民家しかない。かといって民宿に逃げるわけにもいかないし…なんて考えながら後ろを振り向くと、まだ男達は追ってきている。

(しつこいなあ…)

グイッ!

「えっ?」

神谷晴人だ。彼が私の手を引っ張り、民家と民家の小さな路地に入り込んだのだ。少し影になっているせいか、男達は気付かず通りすぎて行った。

「…もう大丈夫だろう。」

男達が見えなくなるのを確認して、ハア〜と息を吐いて彼はしゃがみこんでしまった。けっこう走ったからか、神谷晴人は肩で息をしている。

「あの、大丈夫ですか?」

「…うん、大丈夫。いつ振りだろう?こんなに走ったの。明希ちゃんはずが若いね、息切れてないもんね…」

ハアハアと息を整えながら、キャップを取って汗を拭きながら苦笑いしている。一方の私は汗はかいているが、息は切れてない。なんか若いのが申し訳ない感じがして私も苦笑いになる。

「あの、すみませんでした…」

一息ついた所で謝った。スカウトの話も断ってるのに、何でどうして彼に助けられたのか頭が理解できてない。

「明希ちゃん、違うよ。」

彼はにっこり笑って立ち上がる。すごく優しい表情だ。

「えっ?」

「すみませんじゃなくて、ありがとうだよ。」

「…ありがとうございます?」

「どういたしまして。」

ギュツと手を握られて、今でも手を繋いでいることを思い出した。パツと手を離す。

「あゝあ、残念。」

手を離れたことに残念がつている神谷晴人は冗談なのか本気なのがよく分からない。

「明希ちゃん、ちょっと散歩しない?」

「はあ…」

路地から出て、特に目的もなく歩きだした神谷晴人に後ろからついていく。

「あの、さっきどうして助けてくれたんですか？」

逃げて来た道を戻りながら、気になっていたことを聞いた。

「…」

私の言葉に驚いたかのように、神谷晴人はキョトンとした顔で後ろからついてきている私を見た。

「？」

私は、何で驚かれてるのか不思議で彼を見た。

「…明希ちゃん。」

「はい？」

「それ、無意識？」

「は？」

神谷晴人の言ってることが、分からなかった。

何が無意識なんだろう？何かを無意識にしたのだろうか…考えても思い当たらない。

「…ううん、今の忘れて。ゴメン、変なこと言っちゃって。」

「はあ…」

につこり笑っている神谷晴人にポンポンと頭を撫でられる。何か変な気分だった。

「さっきの質問の答えは、明希ちゃんがナンパされてて凄い嫌そうな顔して、助けてって聞こえたから。」

思わず自分の顔に手をあてる。

「そんなこと…。」

「すごい顔してたよ。ここに皺寄せて。」と、自分の眉間を指で指してる。

「明希ちゃんは、可愛いんだから注意してないとダメだよ？」

サラリと凄いことを言われた気がした。今までお祖母ちゃんや咲恵くらいにしか言われたことがない。身長があるからか、男の子からはそんな風に見られたこともなし、春生からは少しは女らしくしたらなんて言われてくるくらいだ。

「か、可愛い？誰が？」

目がパチクリしてしまう。

「誰って、明希ちゃんが。凄い可愛いじゃん！」

肩をガシッと捕まれて、急に力説された。

「あの？」

「あつ、ゴメン！」

パツと肩から手が離れる。神谷晴人は、また歩き出した。

「ところでどうしてあそこに居たの？」

「…ちょっと気分転換に…」

よく分からない話から逸らされたのはいいが、その副社長に気分を害されたからなんて話せない。けど、あからさまに不機嫌な態度をしたのは謝らないといけない。

「神谷さんはどうしてあそこに？」

「…ちょっと気分転換に外出たら、明希ちゃんがナンパされてて、つい…」

どうやら、民宿から出てきたら私の声に気付いて助けてくれたようだ。

「…ありがとうございます。」

にっこり微笑んだ神谷晴人は、またポンポンと私の頭を撫でた。

「可愛い女の子が困ってるなら助けないとね。」

と、そんなセリフにウィンクまでされるとやっぱり芸能人だと思った。私が可愛いというのも、きつと社交辞令で、色んな人にも言っているに違いないって、そう思うとなぜか胸が苦しくなった。

俺はどうかしてしまったのだろうか？

今、目の前で可愛いと言われて困ったような照れてるような顔をしている明希ちゃんを、ものすごく抱き締めたいと思っているのだ。

(落ち着け、俺！)

ただでさえ明希ちゃんは可愛いのに、本人がそれを自覚していないなんて今時の女子高生に限ってあり得ない話だ。

ここが、都会じゃなく離島だからか？それとも計算でそう振る舞っているのか？…いや、明希ちゃんの態度からして全く自覚がないんだと思った。彼女はおそらく凄く純粹だ。そんな彼女を俺はどうして気に掛ける？これじゃあ、俺の目惚れだ。確かに今まで俺の周りにはいなかったタイプだ。でもだからって一回りは違うのに、いい歳して女子高生に一目惚れ？…まさかね。

「神谷さん？どうかしましたか？」

「え？」

頭の中で自分と葛藤していたら、明希ちゃんが話し掛けてきた。不思議そうに俺を見ている。

「うっん、何でもないよ。それよりお腹減らない？」

「なら、民宿に戻りますか？そろそろお昼だし、ご飯あると思いますよ。」

「そうだね、宿のご飯美味しいから。戻ろっか？」

「それじゃあ、こつちですよ。」

そう言つて、今度は明希ちゃんが俺の前を歩いていく。デニムのショートパンツから健康的な二本の脚が後ろ姿からでも、彼女のスタイルの良さを輝かせている。副社長じゃないけど、本当に芸能界に入れば売れると思うのに…

「神谷さん。」

「え？」

ボケつと後ろ姿を見ていたら、明希ちゃんがぐるりと振り向いて、俺の歩幅に合わせてくる。

「何？」

「…あの、朝のことなんですけど。副社長さん、帰つたって聞いて…」

「うん、仕事があるからつてもう帰つたよ。」

「それで…その…」

どつちやら明希ちゃんも朝のことを気にしているようだ。

「朝はゴメンね。ビックリしたでしょ？」

「え？いや、私の方こそ失礼な言い方してすみません。」

俺に向かってペコつと頭を下げる。こういう言い方は失礼かもしれ

ないけど、まだ高校生なのにしっかりしていると思った。

「ハハ、俺達会ってから謝ってばかりだね。朝のことは副社長も強引すぎたと言ってたから、明希ちゃんは気にしなくていいんだよ。」

俺は笑って明希ちゃんの頭をポンと撫でた。

「でも…」

「この話はおしまい！ね？あ！そうだ。俺、これから撮影始まるまではオフなんだ。良かったらこの島を見て回りたいんだけど、明希ちゃん案内してくれない？」

「案内ですか？私に？」

神谷晴人の提案に少し驚いた。なんで私なんだろう？春生だっているのに。

「そう、明希ちゃんに。」

につこり笑いかけてくる。ご指名は有り難いかもしれないが、受験を控えてる私にはそんな遊んでる余裕は正直ない。

「あの、春生じゃダメですか？」

「うん、明希ちゃんがいいんだ。自分でもよく分からないけど、明希ちゃんなら仲良くなれそうな気がするんだ。」

「仲良くですか？」

まさかそんなことを言われるとは思ってなかったから、神谷晴人の顔をポカンと見てしまう。そんな視線に気付いたのか、彼は私を見てにっこり笑っている。

「そう、友達として。あつ！おかしかな？いい歳してこんなこと言うの。」

「…おかしくはないと思いますけど…」

芸能人に友達になってくださいなんて、私の人生にないと思ってた。そもそも芸能人なんて無縁だと思っていたからだ。

「神谷さんなら友達たくさんいそうですね…それに私、歳が離れすぎてるし。」

本気なのか冗談なのかが分からない。神谷晴人から見ればただの女子高生だ。友達を探すなら芸能界にもたくさんいるはずだし…

「歳なんて関係ないよ。確かに友達はあるけど、せつかくこうして会ったんだもん。俺は明希ちゃんとも仲良くなりたいたいんだ。」

真面目な顔でそんなことまで言われると、断りづらくなってしまった。なぜかは分からないが、神谷晴人は私の中にストーンと入ってくる。咲恵でも航太とも違う感覚で。

「…友達はいいですけど。案内はできないかもしれないです。」

「本当？ありがとう！」

ガシツと私の両手を神谷晴人の両手が握り締めて、ブンブン立てにふっている。すごい無邪気な笑顔で。こんな顔はテレビでも見たことがない。なんていうか…子供っぽいとかじゃなくて、少年みいだ。航太でもこんな風に笑わないと思う。純粹に友達になれたことが、嬉しいんだと感じた。引き込まれた…その無邪気な笑顔に。

「明希ちゃんが受験で忙しいのは知ってるからね。時間が空いた時にでも案内してくれたら、それでいいよ。」

ハツと我に返り、両手を離す。なんだろう？今のぼんやりした感じ…

「明希ちゃん？」

うわの空の私に心配そうに声を掛けてくる。

「な、なんでもないです。それより、どうして私が受験すること知ってるんですか？」

「美佐さんが言った。」

「お母さんが？」

「うん。でも俺が聞いたことだから、美佐さんがペラペラ話したわけじゃないよ？」

「…知ってます。お母さんはそんなことしませんから…」

「大好きなんだね。お母さんが。」

お母さん…実際には叔母さんだが、お母さんには本当に感謝してい

る。言葉ではいい現せないくらいに…そんなことを考えてたら、目頭が熱くなってきた。神谷晴人にバレないように、私はにっこり笑った。

「はい、大好きです。」

そんな話をしていたら、民宿が見えてきた。少し歩みを緩めて神谷晴人が言った。

「そっか、俺のお袋は死んじゃっていないけど。明希ちゃんはお母さんのこと大事にしてあげるんだよ？」

「えっ？」

死んじゃってという響きに胸が苦しくなる。

「どうかした？」

返事がない私に、声をかけてくる。

「お母さん亡くなられてるんですね…」

「明希ちゃんが暗い顔しなくてもいいんだよ。お袋が死んだのもけっこう前だし。」

「…そうなんですか。」

「うん。だから変な話だけど、俺の分までお母さん大切にしてあげてね？」

その切ない言葉に、私はもう笑うことしかできなかった。

それから民宿までの数メートル、私は何も話すことができなかった。

「今日はありがとう。また話そう?」

民宿に着くと、神谷晴人は手を振り部屋に戻っていった。私もそれを見送ってから部屋に戻る。

羽織っていたパーカーを脱いで、ベッドに座る。この短い間に私の中にある芸能人、神谷晴人の印象がガラリと変わった。

テレビのイメージは大人の男の人で、キレイ目な顔立ちのからかクールな印象だった。

ただど話してみte感じたことは、その親しみやすさだった。自分でも不思議なくらい神谷晴人のことを知りたいと思っていた。

「明希、いるか?」

「いるよ。何?」

お父さんが、ドア越しに呼んでいる。私は立ち上がってドアを開けた。

「どこ行ってたんだ?さっき来たらいなかったぞ。」

「気分転換に散歩してたの。それで何か用?」

「そうだった！朝話してたバイトが来たから、下に降りてこい。」

「分かった。」

そのままお父さんと一緒に行こうとすると、ちょっと待てとベッドの上に脱いであったパーカーを渡された。

「いいよ、暑いもん。」

「駄目だ、傷が見えてる。」

そう言つて、お父さんは私の右肩を指差した。

「本当？この服見えないと思つたのにな。」

私は部屋の角に置いてある鏡で確認する。お父さんの言つてた通り、少し見えていた。

私の背中には右肩の付け根くらいから背骨の中心にかけてちよつと大きめの古傷がある。大きいといつても目立つほどじゃないけど、やっぱり年頃になつてくると気にはなつてくる。

言われた通りにパーカーを着た。そんな私の背中をポンポンと優しく叩き、お父さんは先に下へ降りていった。

食堂に行くと、大学生っぽい人たちが二人いた。てつきりバイトは一人かと思つていたら、二人もいたから驚いた。しかも男女の二人組。

その二人とテーブルを囲んで、うちの家族が座っている。どうやら私が最後みたいだ。

「明希、こつちにいらつしゃい。」

私に気付いたお母さんが声をかけてきた。

「さつき話した娘の明希です。」

お父さんが、私をバイト二人に紹介する。

「はじめまして。」

ペコつと頭を下げる。そこで改めてバイトに来た二人を見た。

男のほうは、いい感じに日焼けした肌に短い茶色の短髪で、奥二重の大きい瞳がイケメンを象徴している。どちらかと言えば草食系。でも、神谷晴人同様芸能人でも通用するくらいだと思う。

女のほうは、男とは真逆で色白だ。今まで雑誌の中でしか見たことないくらいに、胸元まである明るい茶色い髪がフワフワに巻かれている。

いわゆるお嬢様系な顔立ちで、二重の大きい瞳はアイメイクと付けまつげによつてさらに大きくなっている。自己紹介がまだだったみたいで、お父さんがどうぞと促している。

「佐野 徹さのとおとです。横浜の大学に通ってます。これからお世話になります、よろしくお願いします。」

ニコツと笑う顔は、爽やかすぎてガムか何かのCMみたいだ。その笑顔が眩しすぎるくらいだ。

佐野さんは、来年から就職活動に忙しくなるからと今年の夏は前からやってみたかったリゾートバイトに応募したらしい。

「大原 美央おほのほです。東京の美大に行つて、ここにいる間に絵を描

きたいと思っってます。もちろん、しっかりと働くので、よろしく願いします。」

声優さんかと思うくらいの、可愛らしい声で話す大原さん。その外見から美大なのは意外だと思ったけど、今年四年で卒業制作の為にこの島に来たかったみたいで、どうせならバイトも…という感じらしい。

私と春生も二人によるしくお願いしますとお辞儀した。

「それじゃあ、仕事内容は電話で話した通り宿泊客のご飯の世話と掃除が主です。時間はとりあえず10時から働いてもらいます。休憩は皆で交代制、それじゃあ短い間だけど、お願いしますね。今日は来たばかりで疲れてるだろうから、ゆっくり休んで明日からきちり働いてもらうからそのつもりで。」

二人がはい、と返事をするとお父さんが、二人を部屋に案内していた。

「神谷さんも、もちろんカッコいいけど、あの佐野くんもイケメンね！」

三人が出てった後に、お母さんがうつとりした顔をして私と春生に話した。

その顔に呆れてしまう。

「お母さん、お父さん聞いたら悲しむよ？」

「それとこれとは別よ!」

母親の慌て振りに、私と春生は笑ってしまふ。

「さあさあ、お昼にしましょう！手伝ってちょうだい。」

パンパンと手を叩いて、私と春生を台所へ急かす。

「えー、何それー！」

二人で笑いながら、お母さんから背中を押されて台所へ入った。

私とお母さんが、並んで昼食の支度をして、春生はテーブルに肘をつけて、テレビを見ている。すると、勝手口が開いてお祖母ちゃんが入ってきた。この時間は離れにいるから、こっちに顔を出すのは珍しい。

「明希、ちょうど良かった。これ。」

私を見つけるなり、本屋の紙袋を渡してきた。見た目からしてかなり大きい。

「何これ？」

「さっき、仲里先生なかざとのここに行ってきたら、明希に渡してくれって。」

「先生が？なんで？」

私はとりあえずそれを受け取った。ずしりと重い。
仲里先生は、近所で町医者をやっている。お祖母ちゃんもうちの家族も常連さんだ。

何々？とお母さんも春生も私の肩越しから覗き込んでくる。袋を開けると、分厚い医学書とセンター受験用の問題集が入っていた。

「まあ！先生にお礼言わなきゃね！」

「何だ、参考書じゃん。」

春生はつまらないと言ってまたテレビを見始めた。

お母さんはお祖母ちゃんと、何かお礼しないと話始めた。

「ちょっと待ってよ！私、先生に話してないけど……」

本をテーブルの上に置いて、盛り上がってる二人に割って入る。

確かに、東京の大学に進学して医者になりたいというのが将来の夢だ。でも、この話は家族と咲恵と学校にしか話していない。だから、仲里先生から本をもらうなんておかしな話だ。

「お祖母ちゃんが話したんだよ。」

「お祖母ちゃんが？」

意外な犯人にビックリした。

「こないだ行った時にね。お祖母ちゃん、勉強のことはよく分からないけど、明希の応援したくてね。先生に相談したんだよ。」

「お祖母ちゃん…」

一筋の涙が頬を伝った。

「明希、頑張りなさいね。」

お祖母ちゃんのしわしわの手が、涙を拭ってくれる。私の右手をギョツと優しく、でも力強く両手で包み込んでくれた。

「…うん、うん。」

もう涙が止まらなかった。とめどなく溢れてくる涙で、何も見えな
い。

お母さんが、肩を優しく抱いてくれて、頑張りなさいと言ってく
る。

本当の孫でもない私に、ここまでしてくれるお祖母ちゃんにありが
とうと言いたいの、泣いているから思うように喋れない。

「明希の気持ちは、お祖母ちゃんちゃんと受け取ってるよ。」

お祖母ちゃんは、また優しく手を握ってくれる。

うん、うんと頷くことしかできない私を、春生がからかいにやって
くる。

「ホント、明希姉は泣き虫だな。」

「……つるさい。」

その言葉で涙が引っ込んでしまう。左手で涙を拭う。

「こら、春！いい雰囲気を壊さないの！」

お母さんが春生を怒るが、怒るポイントがズレている…お祖母ちゃんもそれを分かっているのか、クスクス笑い始めた。私もそれ移って笑う。

「なんだ？皆して笑って。いいことでもあったか？」

お父さんが、不思議な顔をして台所へ入ってきた。

「お父さん！見てみて？これ！」

そう言ってお母さんは、もらったばかりの分厚い本二冊を抱えてお父さんに見せている。

「どうしたんだ？その本。」

「仲里先生から頂いたのよ。明希につて。」

「先生が？明希に？それまたなんで？」

「私が先生に明希のことを話したんだよ。力になれないかって、したらこれをもらったんだ。」

「そうか、良かったな！明希。」

話を聞いたお父さんも、私に笑顔で頑張れと肩を叩いてくれた。一人ぼっちになった私を、暖かく迎えてくれた家族に本当に感謝した。

「ありがとう！私、頑張るよ。」

改めて意気込みを伝えると、皆が応援してくれた。

お祖母ちゃんが離れに帰り、お父さんは帳簿をつけている。春生は携帯画面を見てニヤニヤしている。おそらく真由ちゃんからのメールでも来たのだろう。自分の弟ながら、まだ中学生なのに彼女がいるなんて、羨ましい…。それを眺めながら、さつきもらった医学書と参考書を見ていた。

お母さんが、出来たお昼ご飯をお皿に盛り付けて完成。午前中に走ったせいか、私のお腹はペコペコで、お腹が鳴るのを我慢するのに必死だ。

「さあ、これ神谷さんに届けてきて。」

はい、とお皿を持たされる。

「何で、私？」

「明希が一番暇そうじゃない。」

お母さんが皆を見渡してニコニコ笑っている。

「暇じゃないし…」

お父さんはまだ帳簿とにらめっこしていて、春生は何時の間にかいなくなっていた。

「ほら、ほら、お客さん待たせないの！」

「えー。」

口を尖らせて文句を言うが、聞き入れてもらえなかった。

「ていうか、なんで神谷さんは部屋で食べるの？食堂じゃダメなの？」

「ああ、頼んだんだよ。撮影始まるまでは目立つことさせないでくれって、マネージャーの山崎さんから。それに、新しくバイトも入ったから騒がれるのもなんだし、と思って。だから、しばらくは部屋で食べてもらうことになったんだよ。」

お父さんが答える。そういえば、昨日も航太にそんなようなことを話していたっけ？

「ふ〜ん。分かった。」

料理が載ったお盆を、両手で持ってソロソロと階段を上げる。二階の客室の一番角が神谷晴人の部屋だ。この民宿で一番見晴らしがよい部屋。

ふうっと呼吸を整えて、ノックをしようとお盆をバランスよく持とうとした。だけど、中々上手くいかずてこずっている。ようやく片手が開いて、ドアの前に拳をもって叩こうとすると…

ガチャっ

「おわっ！」

「っ！！」

神谷晴人がタイミングよく中からドアを開けた。お互いビックリして、その場で固まってしまった。

「明希ちゃん？」

ノックしようとしていた、拳をパツと下ろす。その反動でお盆がグラツと揺れてしまった。

「わっ！」

慌てお盆を支えようと手を伸ばす。間一髪の所で、ご飯が台無しになることは免れ、ホツと胸を撫で下ろす。

すると、自分の両手に温もり感じて、手の方に視線を移した。

神谷晴人も危ないと思ったのか、彼も両手でお盆を持っていた。思わず、両手を離してしまった！

「わあっ！」

「おっと！」

私が手を離してしまったせいで、今度は彼がバランスをとっている。

「ふう、セーフ。」

ニコツと笑って、私の方を見る。

「ご飯持ってきてくれたんだね。ありがとう。」

「あつ、そうです。」

神谷晴人は、お盆を持ったまたクルツと振り返って部屋の中に入って行く。急に手持ちぶさたになった私は、入ろうか迷っていると、中から声が聞こえてきた。

「明希ちゃんも、入って。」

「…失礼します。」

おずおずと中に入る。昨日の恥ずかしいことが甦るが、フルフルと頭を振った。

ガチャガチャとお盆からお皿を出す音に、我に返ると神谷晴人がテーブルにお皿を並べていた。

「美味しそう。」

ニコニコしながら、料理を見ている。

「あつ！お茶入れますね。」

「おかまいなく。」

その返事に、笑ってしまった。

「お客さんだから、かまいますよ。」

「あつ、そうか。」

そんなトボけたやり取りに、二人してクスクス笑いあう。私は、部屋に常備してあるお茶セットからお茶を作って、彼に出した。

「どうぞ。」

「ありがとうございます。それじゃ、いただきます。」

パンと手を合わせる姿を見て、芸能人でもちゃんとするんだなあと感じてしまう。

神谷晴人も食べ始めたことだし、私のお腹も我慢するのは限界に近かった。

「それじゃあ、またお皿取りに来るんで失礼しますね。」

「えっ？明希ちゃん、帰るの？」

立ち上がるうとする私を、ビックリした顔で神谷晴人が見ている。

「はい、ご飯届けにきただけなんで。」

「えー。一人で食べても寂しいじゃん。」

（…じゃん？）

いい歳した大人が、一人でご飯食べるのが嫌で駄々をこねている。

「プツ。フフフ。」

その光景が何だかおかしくて、つい笑ってしまう。

「あ、笑ったね？俺が大人気ないとか思ったんでしょ？」

「いや、そんなことないです。」

考えていたことが、見透かされたみたいで慌てて首を振る。それがいけなかったみたいだ。

キュルルルル

我慢も限界に達した私のお腹が、いい加減にしろと言わんばかりに豪快に鳴った。

「!!!」

その音の大きさに恥ずかしくなって、お腹を押さえた。

「アハハハ！」

次は私が豪快に笑われてしまった。余計に恥ずかしくなる。

「明希ちゃんも、お腹すいてるならそう言えばいいのに。一緒に食べない？」

「えっ？」

いくらお腹が減ってるからって、神谷晴人とご飯なんか食べたらず張ってしまうって食べるに食べれない。

「いや、いいです。下に用意してあるし。」

「えー。いいじゃん、一緒に食べようよ。」

なおも引き下がらない神谷晴人。

「でも…」

パンっ

突然、神谷晴人は箸を置いて両手を鳴らした。

「じゃあこうしよう！俺も下で食べる！」

これがアニメか漫画ならきつと、彼の頭の上にキラーンと光った電球の絵が、載っているのだろう。いかにも閃いた的な感じで、ニコニコしながら神谷晴人は私を見ている。が…

「それはダメです！」

一瞬、それならいいかという考えが頭を過ったけど、そうはいかなかった。

2 DAY

「えっ、なんで？」

拒否されるとは考えてもなかったのか、神谷晴人の切れ長の瞳が私の方を信じられないといった目で見ている。

「なんでって…神谷さん、お客さんでしょ？」

「うん？」

私の答えがよく分かってない様子だ。

これが友達なら、何も思わず一緒に台所で食べようという気にもなるのだが…相手はお客さん。いくら神谷晴人でも家の中に入れるわけにはいかないのだ。

「だから、お客さんがうちの台所でご飯食べるのは、ちょっと…」

「あ、そういうことか…」

神谷晴人は、やっと意味が分かったのか、ポンと手を叩いて納得している。

「そういう訳なので、私は失礼します。」

お腹も我慢するのが、限界に達しそうな私は足早に部屋を出ようとした。

「あ、明希ちゃん！ちょっと待って！」

ドアをすでに開けている私を神谷晴人が呼び止めた。

「何ですか？一緒にご飯は食べませんよ？」

空腹のせいか、ちょっとイライラしてきた。

「違うよ。恭一さん、呼んでくれない？」

恭一とはお父さんのことだ。

「お父さんを？」

何でこんな展開になったのかわからないけど、お父さんを呼ぶということは何か粗相でもしたのだろうか？と、思いが過る。

「あっ！そんな暗い顔しないで。ちょっと相談したいただけだから。」

どうやら、暗い顔をしてたらしい私を神谷晴人はバツチリ見ていたらしい。慌てた様子で理由を言ってきた。

「相談ですか？」

「うん、相談。急ぎじゃないから、恭一さんが暇な時について伝えてくれる？」

「分かりました。」

そう言って部屋を出た。

(何だろっ、相談って?)

台所へ戻ると、お母さんとお父さんとさっきのバイト二人がご飯を食べていた。

「遅かったわね。」

私に気付いたお母さんが、ニヤニヤしながら言ってくる。そんなお母さんをジロリと睨む。

「仕方ないじゃん。お茶入れてきたんだから！」

つい、ムキになって言い返してしまう。この反応を楽しんでいるのが、お母さんは意味深な顔して、ふ〜んとまたニヤニヤしている。

「明希も、ご飯食べなさい。」

そんなお母さんにお構い無しなお父さんは、ホントにマイペースだ。

「もう、ペコペコだよ。」

台所に入ってから、キュルキュル鳴りっぱなしの自分のお腹を撫でながら、ご飯が用意してあるテーブルについた。

「いただきまーす。」

手を合わせてご飯を食べようとすると、伝言を頼まれてたのを思い出した。

「そういえば、神谷さんがお父さんと呼んでたよ?」

向かいに座っているお父さんが、何だろうなと首を傾げている。

「さあ?でも急ぎじゃないって。」

二人して首を傾げる。とりあえず顔を出すと言って、お父さんは席を立つ。

「あの、神谷さんて?」

大学生の佐野さんが聞いてきた。
話しているのか迷い、お母さんの顔を見る。

「昨日から1ヶ月滞在のお客さんなの。」

私に変わって、お母さんが説明をしている。

「1ヶ月も?確かにここならそれくらい泊まっていたいかも。」

佐野さんが目を輝かせている。

「佐野くん、私たちもそれくらい泊まるじゃない。」

ピシヤリと佐野さんの隣で、可愛らしい声が響くが美大生の大原さんは、見かけによらずかなりドライな感じだ。

「あつ、そうですね。」

的確な指摘に、佐野さんはアハハと笑いながら頭をかいている。

(…この人、天然なのかな?)

なんてことを考えてたら、大原さんは、ごちそうさまと言って席を立て、台所を出ていった。

それに習ってか、佐野さんも急いで残りのご飯を口に入れている。

「そんなに、慌てなくてもまだ大丈夫よ。」

お母さんが、佐野さんに声をかける。

ふと時計を見ると、まもなく13時になるうとしていた。

今日は、土曜日。まぎれもなく忙しい。もう少ししたら、泊まりのお客さんも来る頃だろう。

私も、ご飯をかきこんだ。

佐野さんも台所を出ていき、流し台にお皿を片付けに行く。

「お母さん、昼から出かけてきていい？」

「いいけど、どこへ？」

お皿を片付けながら聞いてくる。

「仲里先生んとこ。」

「なら、ついでにコレ持って行ってちょうだい。」

はいこれ、と山ほどのおかずが入ったタツパを渡される。

「何コレ？」

「たくさん作りすぎたから、お礼を兼ねたお裾分けよ。ちゃんと、お礼言うのよ？」

「子供じゃないから大丈夫だよ。」

お母さんが、タツパを袋に入れて渡してくれた。

玄関を出て、脇に止めてある自転車の籠にタツパの袋を入れる。ガシヤンと鍵を外して、サドルにまたがると声をかけられた。

「明希ちゃん。」

この声は、神谷さんだ。

振り向くと、真上に太陽があるから眩しそうに目を細めている。

「明希ちゃん、出かけるの？」

「はい。神谷さんもですか？」

「俺？俺は明希ちゃんが見えたから降りてきたんだ。」

「…」

「明希ちゃん？顔赤いけど、大丈夫？」

気付くと神谷晴人が、私の顔の前で手をヒラヒラさせていた。しかも、神谷晴人に言われた通り自分でも顔が赤くなってるのが分かるくらい、頬っぺたが熱い。

「な、何でもありません！」

慌てごまかす。自分でも何で赤くなってるのか分かる。神谷晴人に嬉しいことを言われたからだ。本心かどうかは分からない。けど、あんなことを言われると、正直照れてしまう。

「そう？まだ顔赤いけど？」

そう言う神谷さんの顔は、私がどうして赤くなってるか分かっているかのようだ。それが、なんだか悔しいと感じた。

「もう、からかわないで下さい！」

「ハハっ、ゴメンゴメン。それより明希ちゃんどこ行くの？」

「…えーと、ちょっとお裾分けに。」

さすがに、医院に行くとは言えない。

苦しいごまかしをしてたら、玄関がガラッと開いて春生が出てきた。

「あっ！いた。はい、これ！」

私を見つけるなり、タツパを渡してきた。

「何コレ？」

「これも先生に渡してって。あれ、晴兄も行くの？」

「そう、俺も行くの。」

「えっ!？」

神谷さんを見ると、私の方を向いてにっこり笑っている。

「あ、コレは冷凍しておいてって。それじゃあ気をつけてね。」

そう言って、さっさと中へ入っていく春生。

「…」

「で、どこ行くの?」

せっかくごましたのに、春生のせいで振り出しに戻ってしまった。
ニコニコした顔で、迫ってくる神谷晴人。

「…」

「あ・き・ちゃん。」

「しめんなさい!」

自転車に乗ってたのが幸いした。神谷晴人を押し切って、ペダルを

こいだ。

後ろで名前を呼ぶ声が聞こえる。少し罪悪感があるけど、さすがに仲里先生の所には一緒に行けない。

(本当に、ごめんなさい！)

民宿から10分ほど自転車をこぐと、仲里先生の医院がある。島内でも数少ない、町医者なせいかもしれない。時間も外來の時間はいっぱいだ。ガラス戸を開けると、正面の受付に看護士の夏実なつみさんが座って、カルテの整理をしていた。

「こんにちは。」

「あら、明希ちゃん。いらっしやい。どうかした？」

私に気付くと、顔を上げて笑ってくれた。趣味がサーフィンなせいか、今年もすでにいい感じに焼けていて、ナース服の白色がよく映えている。

「先生、いますか？」

「先生なら今、金城のおばあちゃんのとこに診察に行ってるのよ。でも、もうすぐ帰ってくると思うわよ。」

壁にかかっている時計を見ながら説明してくれる。

「なら待ってますね。あ、それとコレ。お母さんから。」

夏実さんにギッシリおかずが詰まっているタツパを渡す。

「わぁ！いつもありがとうね。おばさんの料理、私好きなのよね。」

タツパの蓋を開けて、夏実さんにはっこり笑っている。

「先生が帰ってきたら頂くわね。」

そう言いながら、夏実さんは受付の奥にある冷蔵庫にタツパを入れている。

「そういえば、明希ちゃん。医者になるんだって？」

受付に戻らず、麦茶を持って来てくれた夏実さんが聞いてくる。

「ここじゃ、何でも筒抜けだ。嫌なわけじゃないけど、思わず苦笑いになってしまう。」

「なれたらいいなって思ってます。」

私の隣に座った夏実さんが、私の手をギュって握る。

「大丈夫！明希ちゃんは要領がいいもの。きっといいお医者さんになるわ！」

「夏実さん、ありがとう。」

頑張るのよ、とさらに手に力を込めてくれた。

「夏実さんは、どうしてわざわざここに来たの？」

ふと、気になっていたことがあったので聞いてみる。

夏実さんは地元出身でもないし、ましてや本島の出身でもない。生まれも育ちも横浜だ。歳も、まだ30歳前だし…

「あー、そうきた？」

麦茶をゴクつと飲んで、何か考えてる様子の夏実さん。単純に好奇心から質問したことだけど、一瞬の沈黙が聞いてはいけないことだと分かった。

「ごめんなさい！夏実さん、今のナシ！」

私が急に謝ったせいで、夏実さんは目をパチクリさせている。

「ううん、気を遣わせちゃってこっちこそゴメンね。ただ、明るい話じゃないからどうかかなと思って。」

麦茶のグラスを両手で持て余している夏実さんは、困った表情をしている。

そんな夏実さんに、何て声をかけていいか分からずにいると、ガチャッと入り口のガラス戸が開いて仲里先生が帰ってきた。

「ただいま。」

「おかえりなさい、先生。」

夏実さんは立ち上がって、先生が持っている昔ながらのお医者さん鞆を受け取りに行った。

私も立ち上がって、入り口に向かう。

「こんにちは、先生。」

「あれ？明希ちゃん？どうかした？」

私がいるなんて思ってもみない先生は、かなり驚いている。

色褪せたTシャツにダメージジーンズ：というより、ダメージしちやったジーンズの方が正しいかもしれない。ちよつとほつたらかし気味の髪の毛はもうすぐ肩につきそうだ。いつも思うけど、まだ40歳なんだし、ちゃんとしてれば多分イケメンだ。それこそ、神谷晴人ばりの。

服装なんてちよつとも気にしてない先生は、眼鏡のズレを直している。白衣を来てないと、到底医者には見えない。それが仲里先生だ。

「差し入れ、持ってきてくれたんですよ。」

「わざわざ？ありがとうございます。」

眼鏡の奥で、ちよつとたれ目な瞳がさらにたれ目になった。

「いえ、それより先生。ありがとうございます。お祖母ちゃんから、本もらいました。」

ペコつと頭を下げた。

「あー、そのことか？役に立つかは分からないけど、参考にはなるかと思って。」

ポンポンと頭を叩かれる。

「さあ、立ち話もなんだから、明希ちゃんもほら。先生もご飯食べ

ましよ。」

鞆を診察室に置いてきた夏実さんに、グイグイと背中を押されて、診察室を通りすぎ先生の家の居間へ。

ちなみに、仲里医院は先生の自宅もくつついている。

「おじゃまします。」

はい、どうぞとお茶を出される。

手伝うと言ったら、夏実さんに座ってなさいと言われて、広いちやぶ台の前にチヨコンと座っている。

「はぁ、お腹ペコペコ。」

白衣を脱いだ先生が、お腹を擦りながら座る。

夏実さんが隣の台所で、タツパの中の料理を暖め直していた。

「ところで、明希ちゃんはどうして医者になりたいと思ったの？」

お茶を飲もうと手を伸ばしたら、先生が聞いてきた。伸ばした手を引っ込めて、膝の上に戻した。

「言いくい？」

「いえ、そうじゃなくて…」

私が医者になりたい本当の理由は、咲恵と家族しか知らない。

私が、医者を目指す理由は小さい頃に死んだ父が関係している。私が養子だと知らない先生に、何から話していいか分からなかった。

「言い出しにくいなら、いいんだよ。ただ、僕も医者だから一応言

っっておこうと思っつてね。」

にっこり笑っているけど、なんとなく気迫が籠もってて怖いと思っ
た。
体に力が入る。

「ハハ。そんな身構えなくて大丈夫だよ。」

「はい、すみません。」

まだ力が入ってる私を見て、先生はそのまま話を続ける。

「明希ちゃんがどんな理由で医者になろうとしてるか分からないけ
ど、生半可な気持ちでなっつてほしくないんだ。」

いつもニコニコしている先生が、真面目な顔でこっちを見ている。

「医者というのは、見てくれはカッコよかったりするけど、いつも
いつでも命と向き合わなくちゃいけない仕事だ。病気や怪我だけじ
やなく、心とも向き合わなくちゃいけない。すごいシビアな世界な
んだよ。だからこそ、生半可な気持ちで医者にはなっつてほしくない
んだ。」

先生の言葉が胸に響く。似たようなことを、昔言われた。

「はい、分かっています。憧れとかでなりたいわけじゃありません。
命の重さも、医者の仕事が大変だということも。」

私の顔を見ていた先生が、にっこりと笑った。

「そう、ならいいんだ。ただ、明希ちゃんを目指すものが僕と同じものだから、少しでも先輩として言っておきたくてね。明希ちゃんなら大丈夫だよ。きつとい医者になれるよ。」

「フフ。さっき夏実さんにも同じこと言われました。」

「えっ？そうなの？」

「はい。」

二人して全く同じことを言われたから、クスクス笑ってしまった。

「何？何の話？」

お昼ご飯を持った夏実さんが入ってきた。

それから、先生と夏実さんに色々話を聞いて医院を出る。

分からないことがあれば力になると言ってくれた二人の為に、頑張らないと小さく意気込んで、自転車にまたがった。

3 DAY

「明希ちゃん。」

「えっ？」

名前を呼ばれて、声のした方を見ると、照りつける太陽の下で向かいの道路の縁石に座っている神谷晴人がいた。ヒラヒラと手を振っている。

「か、神谷さん!？」

「やっと出てきた。」

ため息まじりに立ち上がった神谷さんは、道路を横切り私の方に歩いてくる。

私はいえ、置いてきぼりにした人が目の前にいるんだから、驚きの余り立ちすくんでしまった。

「なんでここに!?! いつからいたんですか!？」

私の質問に、意味深にニヤリと笑う神谷さん。

「跡をつけてたんだ。」

俺が、そういつと明希ちゃんの顔は益々困惑した表情になった。その表情がまた何とも言えない。なんて、分かりやすい子なんだろう…。 やっぱり俺の周りに、こんな子はいない。

「つけてた？」

「ハハっ、ウソウソ。美佐さんに聞いて、散歩がてら来たの。」

まさかっという目で俺を見ている明希ちゃんに、これ以上嘘をつくのも忍びないから、手を挙げてあっさり白状する。

「なんだ、ビックリした。」

ホッと胸を撫で下ろしている明希ちゃんを見ると、余程俺がいたのが驚いているらしい。

「それより、何でここにいるんですか？」

「何で？うーん…なんでかな？俺にもよく分からないだよ。ただ、明希ちゃんに置いてきぼりにされたから、どこに行ったの気になって。」

そう言うと、明希ちゃんの頬が真っ赤に染まった。

「またそんなこと言って…。」

少し唇を尖らせる仕草も可愛らしい。

「冗談じゃないよ？俺はいつでも本気。」

俺がにっこり笑うと、さらに真っ赤になった明希ちゃんは莓みたいだった。

(可愛い…)

「神谷さん、帰りますよ。」

明希ちゃんという言葉で、危うく妄想しそうになるのを、必死で止めて現実に思考を戻した。見ると、明希ちゃんは照れ隠しなのかいつの間にか自転車を降りて、自転車を引きながらスタスタ歩いている。

「あっ！待って！」

慌てて明希ちゃんを追い掛ける。

「ねえ、明希ちゃん。」

明希ちゃんに追い付いて話し掛けると、まだ少し頬が紅かった。

「何ですか？」

俺と視線を合わせず、返事が返ってくる。

「明希ちゃんさえ良ければなんだけど……」

「何ですか？」

俺が、顔を覗き込むとやっと目を合わせてくれた。

「どうしてあそこに何時間もいたの？」

「……どうしてって、世間話をしてたら遅くなっただけです。」

少し口調が早くなった明希ちゃん。俺の方を見ない所をみると、あ

んまり聞かれたくないようだ。

「ふーん。」

「嘘はついてないですよ！」

怪しい…。

心なしか、歩く速度も速くなってる気がする。明希ちゃんは多分嘘はついてないだろう。でも、何かを隠している。

「何か、隠してない？」

俺の一言で、スタスタ歩いていた明希ちゃんの足がピタリと止まった。

今まで前を見ていた彼女の瞳が、俺の目を捕えた。

「例え何かを隠していても、神谷さんには関係ないです。」

この時、自分の性分が嫌になった。

俺は、昔から知りたいという思いがあると、例えくだらないことでも自分が納得するまで、調べたり聞いたりしてきた。

それが、今回のことでソレが心底嫌なった。

明希ちゃんに、関係ないと言われてショックを受けてる自分がいるのだ。

彼女の瞳は、真剣そのものだ。それが余計に寂しさを募らせる。

「すみません…」

さすがに言い過ぎたと思ったのか、気まずそうに謝ってくる明希ちゃん。何も悪くないのに…

「いや、明希ちゃんが謝ることじゃない。ただ俺が聞いたただけだし。でもいつかは教えてくれると嬉しい。」

そう言うと、彼女は困ったように笑った。
そしてまた歩きだす。

「神谷さんは、何でそんなに気になるんですか？」

確かに、普通ならそう思うだろう。でも…

「何でかな？割と昔から気になることは素直に聞く質でね。でもこんな風に知り合って間もない子に、聞くのは明希ちゃんが初めて。」

そう、自分でも分からないでいた。聞かれてもそう答えるしかない。そんな俺を、キョトンとした顔で明希ちゃんは見ていた。

「あっ！冗談とかじゃないよ？自分でも何で分からないんだよね。」

俺自身も答え方がよく分からないから、困ってしまっ。

「プツ。なんか面白い人ですね、神谷さんて。」

隣を見ると、明希ちゃんが吹き出していた。

「そう？俺なんていつもこんなだよ？」

「なんか昨日から、違う一面ばかり見てる気がします。」

まだクスクス笑っている。やっぱり笑うと、お日さまみたいで心が暖まる感じがする。

「明希ちゃんは、俺のことどんなイメージでいたの？」

これも素朴な質問だ。

「どんな？うーん。クールなイメージですかね？大人の男の人だし。」

「クールかあ…じゃあ、本物はこんなんで、がっかりした？」

「えっ！？がっかりはしてないですよ！」

俺が顔を覗き込むと、明希ちゃんは手をブンブン振って、必死に否定している。

「がっかりは？てことは、多少は残念だったってこと？」

「そ、そんなこと思ってないです！ただテレビで見るより、カッコいいし気さくな人なんだなって。」

「…」

「神谷さん？」

慌ててる明希ちゃんが、可愛くて、意地悪してみたくなくて、してみたらこの不意打ちな素直さは反則だよ…。

「ううん、ありがとう。なんかすごく嬉しい。」

この歳にもなつて、照れてしまう。他の人にカッコいいとか言われても何も感じなかったのに、明希ちゃんに言われると心底嬉しいと思つた。

「そつだ、明希ちゃん！この島で、一番オススメの所に案内してくれない？」

照れ隠しもあつてか、俺は話題を変えた。隣で明希ちゃんが、目をパチクリさせているのが分かる。

「えっ？私が？」

「そつ。」

「オススメの場所ですか？」

「うん、そつ。もしくは、お気に入りの場所。」

「お気に入りの場所？」

隣を見ると、歩みを止めた明希ちゃんが、ブツブツ独り言を言いながら何か考えてる感じた。

「あの、今からですか？」

「うん。まだ夜まで時間あるし。」

俺は時計を見る。まだ15時すぎだ。できたら一緒にいたいって考

えてた俺の隣で、まだ何か考えている明希ちゃん。

「何か用事でもあった？」

「いえ、そういうわけじゃなくて…」

自転車を引きながら、今度はトボトボ歩き始める。

(俺と一緒にいたくないんだろうか…?)

「じゃあ、何。俺と、いたくない？」

「違っ、違いますよ。」

慌てて否定する明希ちゃんを見て、ホッとしている俺がいる。

「あの、私のオススメの場所に行きたいんですよ？」

「うん。こうして会えたのも何かの縁だしね。どうせなら、この島のいい場所を見てみたいんだ。」

「そうですか…でも、ソコ、今は見れないんです。」

「うん？」

遠慮がちに言う明希ちゃん。俺は、言ってる意味が理解できず、間抜けな返事をしてしまった。

「その、夜しか見れないんです。」

「あ、そういうことね。」

「あと、ここからだ歩いて行くにはちょっと遠くて…」

俯いて話す明希ちゃん。なんだか、案内したくないようにも聞こえる。

「もしかして、案内したくない？」

「えっ？そうじゃなくて…いつもは1人で行ってるから…その、あの…男の人と一緒にというのは…」

「くっ。」

「神谷さん？」

「ごめつ。我慢できなくて。くっ。」

堪えきれなかった。

知り合って間もない男から、友達になっってくれと言われ、さらに今からどこかに連れてけとまで言われて、どうしたらいいか悩んでいる。その姿が、あんまりにも真剣で。

俺が女だったら、すぐに嫌だっって言っているかもしれない。けれど、彼女は嫌だと言わない。それが彼女のいい所であり、悪い所だとも思う。

それは俺が芸能人だからかもしれないけど。

もし、もしも俺が、芸能人じゃなくても彼女は今みたいに悩んでくれるだろうか…

「私、そんなおかしいこと言いましたか？」

不思議そうに、けれどちょっと怒っているかにも見える明希ちゃんの瞳は、しっかり俺を見ていた。

「ゴメンね。そうじゃなくて、明希ちゃんはいつも真剣だなんて俺とは大違い。」

自嘲気味に笑う。俺は、自分で言うのもなんだけど、仕事は別として、私生活に関してはかなりちゃんぽらんだ。

「そうなんですか？でも、私だって真面目じゃないですよ。」
そう言っつて、明希ちゃんはクスクス笑っている。

「そうなの？明希ちゃん、委員長とかやってそうだけどね。」
「やってないですよ。リーダーシップとかないですもん。」

俺の隣で笑顔で話してくれる。なんだろう？こんなに楽しいのは。さっきの病院から民宿までは、けっこう距離がある。行きはそう思ったけど、帰りは明希ちゃんもいるから、そんなに距離を感じない。それが証拠に、海岸沿いの通りから宿が見えてきた。

「ところで、明希ちゃんのオススメの場所はどこにあるの？」
「えっ？あの…民宿から30分くらいの所です。」

「…あれ？それならそんなに遠くくない？」

ジリジリと太陽がアスファルトに照りつけている。隣を見ると、明希ちゃんの首筋から汗が一筋流れた。

「あの、ホントに行くんですか？」

「うん、行きたい。」

笑顔で答える俺を見て、うーん、と考えている明希ちゃん。

「…じゃあ、家に帰ってお父さんに聞いてみます。」

RRRRRRRR…

明希ちゃんが、ショートパンツのポケットから携帯を出して画面を確認する。

「お母さん？出ていいですか？」

俺に確認する明希ちゃんに、返事の変わりにニコッと笑った。片手で自転車を押すのは大変だろうと思って、変わってあげる。すると、明希ちゃんは小さく笑って会釈してくれた。

「もしもし？」

「明希？」

「うん。何かあった？」

「今どこなの？」

携帯越しに、少し焦っているお母さんの声がする。

「なんで？もうすぐ着くけど。」

「そう、ならいいんだけど。今、比嘉先生が来たから、早く帰ってきなさいよ。」

「香ちゃんが？」

「先生のこと名前で呼ばないの！いいから早く帰ってきなさい。」
ブツッと、電話が切れた。耳から携帯を外して、ホールドボタンを押して携帯をしまった。

「何よ、もう！」

ちょっと一方的な切り方に、思わず呟いてしまった。

「お母さん、何だった？」

自転車を私の代わりに押しながら神谷さんが聞いてきた。

「早く帰ってこいって。」

「そっかあ、ならゆっくりできないね。」

残念そうに、はぁと息を吐いている。そんな彼から、自転車を受け取る。

「私は帰りますけど、神谷さんどうしますか？」

「俺？どうしようかな」。明希ちゃんとゆっくり話したいのが本音だけど、そもいかないしね。」

なんだろう？私も残念がつている。この感情がよく分からず、とりあえず笑ってみせた。でも、おそらく苦笑いになってると思う。だって、神谷晴人の顔が困っているから。

「それなら、私は一緒には行けないですけど、いい景色が見れる所がありますよ。」

「ホントに！？どこ？教えてくれる？」

私の提案に、みるみる彼の瞳は輝いた。簡単に道を教えて、自転車も貸す。

「ホントに、自転車借りちゃって大丈夫？」

心配そうに私を見ている彼の表情。

「はい、民宿もすぐですから。気を付けて行ってきてくださいね。」

お互いが、それじゃあと行って別れる。

神谷さんは、自転車に乗り今来た道を戻っていく。

私は、ちよつと早足で民宿へ向かった。

気になって後ろを振り向くと、路地を曲がったらしく彼の姿はなかった。

実は、彼もこぎだす時に後ろを振り向いていたなんてもちろん知る由はなかった。

ちよつとだけ、分かった気がした。
神谷晴人がどんな人かを。思ったことをすぐ口に出すタイプだとい
うこと。

「ただいま！」

玄関を開けると、今日のお客さん達の靴に躓きそうになる。

「おかえり、明希。」

ちよつとお母さんが、麦茶を持って台所から出てきた。

「先生、ここじゃなんだから離れにいるから。」

それだけ言うと、パタパタと二階へ上って行ってしまった。
私も、台所を横切ろうとしたら、もう働いていた大原さんとすれ違
った。でも、急いでいたのもあって、軽く挨拶しただけで勝手口か
ら離れへ出る。

離れに入ると、開け放たれた居間に香ちゃんとおばあちゃんがテ
ブルを挟んで座っていた。

「ゴメン！遅くなって！」

ペコッと謝って私も席についた。

「大丈夫よ。約束もしないで、来ちゃったから。」

「それじゃあ、私は向こうに行ってようかね。」

気を利かせてくれたおばあちゃんは、私と入れ代わりに居間を出ていく。

そんなおばあちゃんに、香ちゃんはすみませんとお辞儀をした。

「それで、どうしたの？」

「はい、これ。」

香ちゃんは、鞆の中からA4の封筒を取り出してテーブルの上に置いた。封筒には高校の名前が印字されてある。

「何これ？」

封筒を見ても何か分からず間抜けな質問をしてしまう。

「中を見てみなさい。」

言われた通りに、中を見る。

「これって…」

中身を出して、目が釘付けになってしまった。

「東京の大学の資料よ。」

そう、私が志望校に挙げた大学と他にも何校かの資料やコピープリントだった。

「あれから、先生の昔の同級生が東京の大学で働いてるから、その子に聞いてピックアップしてもらったのと、本島の高校で進路指導担当の知り合いの先生に今のセンター試験の情報を聞いてまとめたのよ。」

香ちゃんの話聞きながら、学校ごとにまとめてある資料やプリントを見る。

香ちゃんの性格なのか、きちんとホチキスで留めてあり、重要だと思われる箇所には赤線が引いてあったり、付け加えた説明文が吹き出しでついていたりする。

「昨日の今日で、こんなたくさん資料作ったの？」

「ええ。昨日の帰り際に、新垣さんに確認したでしょ？」

ニコツと微笑む香ちゃんは、いつも学校で見ていたちよつと頼りなくて可愛らしい香ちゃんじゃなくて、毎日生徒と真剣に向き合ってきている先生の顔をしていた。

「本当は、もう少し早く聞きたかったんだけどね。ここだけの話、他に進路希望が出てない子もいたから、どうしてもそっちが優先になっちゃって。」

はあ、とため息をついて、お茶を一口飲む香ちゃんはいつもの香ちゃんに戻っている。

「ありがとう、先生。」

てつきり、東京の大学なんて無理だと思われてるかと考えてた自分

ちよつと気恥ずかしくて、声が小さくなってしまった。

「当たり前のことをしてるだけよ。生徒の希望なもの、応援しないでどうするのよ。」

照れもせず、私の目をちゃんと話してくれるその姿を見て、受験を控えた高3の担任が香ちゃんに良かったってつくづく思った。

「絶対、合格するよ。」

第一志望の大学の資料を握りしめて、再び頑張ろうと胸に誓つ。

「その大学に行くなら、もう少し偏差値あげなきゃダメよ。こつちなら、今のままでも問題ないと思うけど。」

私が広げた資料の中から、別の大学の資料を渡してきた。

「……?」

「そう、ただ私立なのよね。学費の面だとやっぱり国立よりかは負担がかかっちゃうのよ。新垣さんの志望校は全部国立だったから、それがネックになってるんじゃない?」

「知ってたの?香ちゃん。」

確かに、私の志望校は全て国公立だ。理由は学費のことと正解。でもこのことは、香ちゃんにはまだ話していない。

「分かるわよ。偏差値足りないのに国公立受けるなんて。」

まるで全てお見通しかのような口振りだ。

「だって、東京に行くだけでもお金かかるし、少しでも学費は押さえないと……」

「そうよねえ。東京の大学に行くなんてことになったら、島総出でお祝いしなきゃね。」

クスクス笑いながら、話している。

「後は、来週からの夏期講習には必ず出ること。あなた達が、ちゃんと行きたい大学に行けるようにサポートするからね！」

私の手をギュっと、握って意気込んでいる。でも、ふと不思議な点があった。

「達？他にも東京に行く子がいるの？」

気になって聞いてみる。

「あら、言ってなかった？学年トップの高良くんたから。彼も新垣さんと同じで、東京の大学志望よ。」

まさか、こんな田舎の島に私以外にも、東京の大学を受験する人間がいるなんて思わなかった。

「えっ！高良くんも!？」

高良くんは、去年沖縄本島から、引越してきた子で、まさに草食男子って感じ。面識はあるけど、あんまり話さないからちよっと苦手なタイプだ。学年トップと言っても一クラスしかないうちの高校。

でも、彼の頭は他の皆と、私もそうだけど…飛び抜けて良かった。

「そう。だから、夏期講習は東京組だけは、特別講習にしたからよろしくね。」

その笑顔が、絶対に来なさいよと言っている。

はい、と一枚のプリントを渡され、見てみると、午前中にビッシリとカリキュラムが組まれている。

「何これ？前のと違う!」

「組み直したの!文句言わずに来なさいよ!第一志望、行きたいんでしょ?」

それを言われると、文句は言えなかった。

第一志望の国立大学には、是が非でも行きたかったから。

「分かってるよ。」

「あ!もうこんな時間!ちょっと長居しすぎちゃった。」

腕時計を見た香ちゃんは、バツと立ち上がって帰り支度を始める。そのまま離れの玄関まで、急ぎ足で歩き、そのまま帰って行った。

「明希、終わったのかい?」

香ちゃんの出ていく音が聞こえたのか、台所からおばあちゃんが出てきた。手にはさんぴん茶を持っている。

「うん。」

「お茶でも飲んでくかい？」

時計を見ると、夕方の16時過ぎだった。

「うん、飲む。」

おばあちゃんと二人さっきの居間へ戻り、窓の開け放たれた縁側へ座る。

まだまだ日差しはキツイが、湿気がないから縁側へ出ても風が通り抜けて気持ち良かった。

「はい、明希。」

「ありがとう。」

おばあちゃんからお茶の入ったグラスを受け取る。氷で冷やされたグラスは気持ちがいい。

「昔、ここでお茶を飲んだの覚えてるかい？」

「うん。」

おばあちゃんが、一口お茶を飲んで空を仰いだ。まるで、その時のことを思い出してるようだ。

あれは、ここの家族になつたばかりの頃だ。

その日も、いい天気だった。

「明希、これ離れのおばあちゃんに持って行って。」「
台所にいるお母さんに呼ばれて、宅配物を受け取る。」

「はい。」

当時の私は、今のお母さんくらいにしかどう接していいのか分からず、この家に馴染めてなくて心を閉ざしていた。

離れに行つて、ピンポンとチャイムを鳴らす。

「はい。あら、明希だったの？」

今より少し若いおばあちゃんがパタパタと出てきた。

「あ、あの、これ。」

おずおずと宅配の荷物を渡す。

「あら、ありがとうね。」

優しい笑顔を私に向けて笑ってくれた。

「そ、それじゃ……」

そう言つて、そそくさと出ていこうとする。

「明希、ちょっと待って。一緒にお茶でも飲まないかい？」

「えっ、でも……」

どうしていいか分からず、玄関の戸口でもジモジしてしまふ。

「ほら、お入り。」

さっきの笑顔のままおばあちゃんは、自分のスカートの裾を握っていた手を優しく握って縁側に連れてきてくれた。

「あっ…」

そこには、今は亡くなったおじいちゃんがすでにお茶を飲んでいた。

「なんだ、明希か。」

おじいちゃんはおばあちゃんみたいに愛想はなかったし、厳格な氣質のせいもあるからか、おじいちゃんはホントに苦手だった。

「明希、こつちに座りなさい。」

おばあちゃんが台所に行ってしまったために、居間で立ちすくんでいた私に見兼ねたおじいちゃんが声をかけてきた。

トコトコと歩いて、言われた場所に腰を落とす。

そこは、おじいちゃんの隣だった。ただでさえ緊張しているから、おじいちゃんの方が怖くて見れなかった。

「明希、学校はどうだ？」

「は、はい。楽しいです。」

「そうか。」

「…」

おじいちゃんもペラペラ話す方じゃないから、会話が続かなかった。

「明希、お待たせ。」

おばあちゃんが、さんぴん茶を持って縁側にやってきた。

「ほら、これもお食べ。」

パイナップルがカットされて、お皿に盛られている。

「でも…」

「明希。」

おじいちゃんが話しかけてくる。声が低いから、怒ってなくてもドキドキしてさまう。

「今日の夜に、いい所に連れてってやるから晩飯食ったらトラックんどこ来い。」

「えっ?」

「おじいちゃんが、明希と遊びに行こうって誘ってるのよ。」

おじいちゃんと私の間に入って通訳してくれるのは、いつもおばあちゃんだった。

そして、晩ご飯を食べた私はお母さんに話して、トラックへ向かう。まだ小さかった春生が、一緒に行きたいと駄々をこねていたのを、覚えている。

駐車場へ行くと、すでにおじいちゃんは運転席に座っていて、おば

あちゃんもいた。

助手席に乗り込み、おじちゃんとおばあちゃんに挟まれる形になる。

車に揺られて30分くらい。島の中でも一番高い場所に着いた。ここは、小高い丘になっていて、上から見渡せるように展望台があるのだ。

おじちゃんは、トラックから降りるとおもむるに、芝生にゴロリと寝転がった。

「明希、お前も横になれ。」

「うわぁ……」

横になった私が目にしたのは、満天の星空だった。

おじちゃんとおばあちゃんが一緒にいることも忘れて、初めて見る綺麗な夜空を夢中で眺めた。

「明希。ここは、この島じゃ一番空に近い場所だ。」

おじちゃんの話している意味が分からなかった私は、返事ができないでいた。寝転がっていたおじちゃんは起き上がり、星空を見ている。

「空に近いってことは、天国にも近いってことだ。」

「えっ?」

「明希、お前。天国にいる母ちゃんに言いたいことがあるんだろ?」

突然のことでビックリした。

「明希、俺たちは本当の家族じゃない。俺たちに言えないことがある。ずつと我慢してたんだろ？だけどここなら天国にいる母ちゃんにも聞こえるだろ？だから、何でも話せばいい。」

ポンポンと私の頭を撫でて、おじいちゃんは車まで戻ってしまった。

「…どうして？」

おじいちゃんが歩いて行った姿を見て呟いた。

「明希が最初に家に来た日から気付いてたんだよ。一回も心から笑ってないだろ？だからおじいちゃんも皆も心配でね。いつかその蓄めているもので明希が壊れてしまえそう。でも、私たちは本当の家族じゃない。だから言いたいことも言えないんじゃないかって。」

自分なりに、よくやっていたつもりだった。まさかここまで思われていたことに、ビツクリした。

「ここなら私たちに話せなくても、本当のお母さんが聞いてくれるから安心だろう？」

涙が頬を伝った。

「……に、会い…ママ…に…会いたい！」

自分の中の何か切れたかのように、星空に向かって叫んでいた。何度も、何度も。

それをおばあちゃんは、ただ静かに見守ってくれていた。

「結局あれから、泣くだけ泣いちゃったんだよね。」

今思えば恥ずかしさが込み上げてくる。

「あの時の明希は、まるでコップいっぱいの水を、零さないように一人で持っているみたいだね。美佐にすら本音を言えないでいたろう？だから、明希が離れに来る度に、おじいさんと話したもんだよ。どうしたら、明希のコップを空にできるかってね。」

クスクス笑いながら思い出に浸るおばあちゃんを見て、私も笑顔がこぼれた。

おばあちゃんの言うとおり、あの頃の私は事故で亡くしたばかりの家族への想いと、この家族の負担になりたくない一心で、自分なりに慣れないながらも、しつかりやっていたと思っていた。

でもそれは子供の考えで、その態度が逆に痛々しくて仕方なかったらしい。それを見兼ねたおじいちゃんが、あの丘へ連れていくと決めたのだそうだ。

後から聞けば、私を引き取ると決めた時に一番喜んだのが、おじいちゃんだという。

だから、今はママは勿論おじいちゃんと話すためにもあの丘へ行っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1467u/>

30DAYS

2011年7月23日15時04分発行